

デジタルワールドの美味しい物語。

羽六兎門

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私、羽六鬼門の考えるデジタルワールドでの短編集です。少し続くこともありますが基本的には一本完結を複数本と言う形にしたいです。

あくまで私の考えるデジタルワールドでのアニメのもの、漫画のもの、ゲームのものと一致するところもあるかもしませんがしあるところの方が多い筈です。

独自設定多分に含みます、オリジジはいませんがオリジキャラ以外出てきません。人間も出てきません、話ぐらいは出てくるかもしませんが。

一部一般のイメージと著しく異なつてているデジモンがいます。パワーバランスがおかしいようなそんなデジモンもいるかもしれません。

尚、これは私のブログ、ぱろつともんの駄文置き場★にもマルチ投稿しています。

目 次

天使のステップの物語。	68
パークエクトなラーメンの物語。	56
魔女のステップの物語。	49
暗黒騎士の夕食の物語。	29
酒神のジユースの物語	12
汚物達とのバーベキューの物語。	1

天使のスープの物語。

「落石から守ってくれてありがとう！」

見上げながらそう無邪気に言うキュピモンを見て違うと感じた。

俺は感謝されるようなデジモンじやないし感謝なんてして欲しくない。確かに落石を蹴り碎いて助けたがそれは目の前で死なれると飯がまずくなるというだけの理由であつて困つてるデジモンを見過ごせなかつたとかそういうものではない。

俺はこの世界を呪うことを宿命づけられた存在である魔王に進化してしまつた。究極体だから目の前にいる幼年期のキュピモンと違つてもう変わることはできない。

「・・・助けたのは気まぐれだ。一分経つたら今度は殺したくなるかもしれない、気が変わる前にとつとどこかに行け。」

キュピモンに背を向けて止めたバイクの近くにあつた岩に座り昼食の準備に取り掛かる。

準備と言つてもパンと干し肉を取り出すだけだ。

しかし今日は少し違う。

この前ガソリンの補給で立ち寄つた街でリアルワールドではなんにでもたつぱりつかうのだというオリーブオイルなるものを買った。どうつかうかよくわからないのでとりあえずパンにかけてみた。たつぱりと言つていたのでヒタヒタするぐらいにかけた。

俺は暴食の魔王と言われているが食べられればなんでもいい訳ではない。

贅沢ではあるがぱさぱさした携帯食は不愉快になるだけだし干し肉もそのままじゃ食べれたもんじやない。

いや、まだ干し肉はいい。野菜と一緒に煮込めば即席でしつかりとした味の付いたスープができる。

「・・・ほんとはそんなことしないでしょ？」

わざわざ俺の前に回り込んできたキュピモンがじつとこちらの目を見て聞いてくる。

「する。超する。もう視界に入つただけで撃つ。視界に入つて無く

ても物音したら即ベレンヘーナ乱射。物音しなくとも探し出して原型無くなるまで撃つ。」

俺はめんどくさいので顔をそむけて今日の昼食に齧り付きながら適当に答えた。

「そう、なの……？、えぐつ……」

・・・まずい、これは非常にまずい。キュピモンが隣で泣いてたら食欲半減というのもあるが単純にこれはまずい。

オリーブオイルがこんなものだとは思わなかつた。それなりに値段が張つたのでリアルワールド式よりはかけていない筈だがまずい。「・・・これくれてやるから泣くな。」

キュピモンの手にオリーブオイルのかかつた何かと食べかけの干し肉を渡す。

「えぐつ・・・いいの？・・・ひぐつ。」

「泣かれると飯がまずくなる。」

キュピモンにあげるならば勿体なくは無い。堂々と新しいパンと新しい干し肉を取りだし今度は少量のオリーブオイルを干し肉にかける。

「うん。ありがとう・・・」

今度はうまい。値段を考えるといい買い物ではないなと思つたがたまの贅沢だ。いいだらう。

「おいしー！」

口の周りを油だらけにしながらキュピモンが歎声を上げた。

元がかなり固いパンだつたからかなとも思つたが幼年期は大概なんでも美味しいと言うものだということを思い出した。

しかしパンと干し肉を食べるとなかなか喉が渴く。確か近くに小川が流动していた筈だ。適当にろ過して煮沸して飲もう。

そう考えて立ち上がると隣でキュピモンが立ち上がつた。

キュピモンがどこか遊びに行くのならこのままここに座つて見えなくなるところまで行つたら立ち去つて別のところで昼食にしよう。そう考えて座るとキュピモンも座つた。

「・・・」

「・・・」

立ち上がる、キュピモンも同じように立ち上がる。

「・・・」

「・・・」

座る、キュピモンも同じように座る。

立つ、キュピモンも立つ。

座る、キュピモンも座る。

立つ、立つ。座る、座る。立つ、立つ。座る、座る。立つ、立つ。座る、座る。立つ、立つ——

「・・・真似するな。」

いらだちを覚えながらキュピモンを三つの目で思いつきり睨みつける。

「何やつてるのー?」

キュピモンは完全体でも震えあがるだろうに一切動じていない様子でこちらを無邪気に見つめていた。

しかたない。あまり気は進まないがキュピモンを家まで送つていつた方がどうやら賢明な判断らしい。大体の幼年期デジモンは何かしら集団で成長期、成熟期になるまで面倒を見てもらえる。落石地帯にいた時点で迷子だらうことは明々白々だった。

「お前、家はどこだ?」

「もうないよー。」

キュピモンがフランスパンと悪戦苦闘しながら答える。オイルが染み込んでていも幼年期には固すぎたか。

「そうか・・・ん?」

おかしくないか?ないじやなくともうないって言わなかつたか?
「なんで無くなつたんだ?」

決して心配しているわけではない。飯までくれてやつた以上安全なところまで見届けないとスッキリしないだけだ。

「なんかねー、あかいあくまさんがね、エンジエウーモンとかピッドモンとかみーんないしにかえてこわしちゃつたのー。」

赤色の、デジモンを石に変える悪魔。一人心当たりがあつた。

「・・・お前の家まで案内してくれるか？」

未だバケツと格闘中のキュピモンに聞くと口のまわりをオイルでベトベトにしながら頷いた。

「後、あれだ。お前が今まで家で食べた物の中で一番うまかったのなんだ？」

この質問に深い意図は無い。単純に助けた後でたかろうと思つたからである。

「ぼくはねー、エンジエウーモンのつくってくれるスープがすきなのー。」

スープ。どんなスープか知らないが今日は朝もサンディッシュだけだつたことを考へるとどんなスープでもないよりはいいという気になつてくる。

派手にやつたな。

小さな村で起きてしまつたその惨状を見て最初に思つたのは呆れだつた。

俺はこの村のデジモンじゃないから悲しまないし怒らない。

下半身の碎けたエンジエウーモンの石像も、頭の碎けたピッドモンの石像も、生きたまま十字架に磔にされている幼年期、成長期のデジモン達も魔王たる俺にとつては趣味悪いな。手間もかかるだろうになんでわざわざこんなことを？ぐらいのものでしかない。

「おや？ ベルゼブモン様じやないですか？こんな辺境の地にどうしたんです？」

エンジエウーモンの石像に座りながら磔眺めていた赤色の悪魔が俺に話しかけてきた。

「フェレスモン、お前がこれをやつたんだな？」

肩に乗せたキュピモンを下ろしながら聞く。

「そうです。なかなかいいとは思いませんか？ 碎け散る天使と天使の守つたものを蹂躪する悪魔・・・私を含めて一つの芸術に昇華されるのです。」

なるほど、やはり悪趣味だということぐらいしかわからん。だが、とりあえず愉悦のためだと見て間違いないらしい。

「で、ベルゼブモン様は何故こんなところに？」

フェレスモンはキュピモンには気づかずに俺に問いかける。

「こいつから『旨い』ステップを作るエンジエウーモンがいると聞いて来た。」

俺が指差すとフェレスモンは初めてキュピモンに気づいたらしい。

「それは申し訳ありません。エンジエウーモンはもうこのように……」

「フェレスモン。問題だ、俺、魔王ベルゼブモンは一体何を司る魔王だ？」

フェレスモンはそこで初めて自分が取り返しのつかないことをしたのだと気づいたようだ。

「ぼ、暴食……」

「正解。」

怯えた声で答えたフェレスモンにベレンヘーナの銃口を向ける。

「第一問、天使型のデジモンと仲良くツーリングする程楽しみにしていたステップが食べられないと知つた時、その原因のデジモンを暴食の魔王はどうする？」

フェレスモンはひいっと短い悲鳴を上げ、エンジエウーモンの石像から転げ落ちた。

「そ、それは……」

「それは？」

俺が一步近づくとフェレスモンが一步後ずさる。

「それはどうするんだ？」

「こ、殺すのではないかと……」

フェレスモンは怯えた演技をしながらもいつでも飛んで逃げられるように羽を使えるだけのスペースを確保している。

小賢しいという言葉はきつとこいつのためにあるのだろう。

銃口を突きつけたからといって撃つとは言つていない。上から爪で切り裂けばそれで終いだ。

「そこまでわかってるなら・・・」

——ダンツ

大きく一步踏み出し威嚇で一度銃を撃つた。今の反応を見たところ俺の敵にはなれないレベルだ。単純に弾丸一発で決まるかもしれない。

「次は外してやらないつてk」

「ダメー！」

俺は背中に柔らかいものがぶつかってきた理由がわからなかつた。お前の世界を壊したのはこいつだろ？恨んで憎んで呪つて殺意を抱いて当たり前じやないのか？

「いたいのはダメー！」

俺がキュピモンをつまみ上げると半分泣きかけながら喚き出された。

「・・・あいつのせいで俺はスープが食べられない。お前はエンジエウーモンやピッドモンにもう二度と会えない。」

魔王になつて何十世紀か、俺は何度となく別れを経験した。魔王だというのに別れは一々辛くて悲しくて切なくていつからか定住するのをやめて一人で旅をするようになつた。

「あんなやついない方がいいだろ？」

子供は単純だ。こういう風に言えば少し葛藤しながらも頷く。
「ううん。」

予想に反しキュピモンは首を横に振つた。

「いたいのはベルゼブモンだからダメなの。」

やはり訳がわからない。銃の反動は確かにあるがたかが知れりえる。

「こころがね、ぎゅうつていたくなるからだめ。」

どうやら心を痛めてしまうからということらしい。

「俺は魔王だ。魔王は殺しぐらいで心を痛めたりはしない。魔王は殺す存在だ。」

幼年期に理屈が通るか怪しいが言わないよりか少しほましだ。

「・・・なんでもうだといたくないの？」

なんで？魔王だぞ？当たり前だろ？悪魔の王だぞ？俺は部下はない
ないけどフェレスモンみたいなのを統率するんだぞ？当たり前だろ
？

でもだつたら何故悪魔だと痛くないのかという話になる。そして
その答えを明確に提示することは俺にはできそうになかった。

「わかつた、痛いのは駄目なんだな？」

キュピモンが頷く。視界の端でフェレスモンが安堵の息を漏らす。
逃げられないと悟つてしまつたからの反応であることは言うまでも
ない。

「でも罰はあるべきだと思わないか？エンジエウーモンも悪いこと
したら怒つたりしただろう？」

またキュピモンが頷く。

「じゃあ決まりだ。フェレスモンは見逃さないがこいつは見逃して
やる。」

勝手に安心していたフェレスモンの頭を鷲掴みにして薄っぺらい
笑いを作る。こういう時は薄っぺらい方が怖い。

「あ、あああああああ・・・」

殺したデジモンをロードする時のようにしてフェレスモンから体
を構成しているデータの中でも根源的なほぼ全デジモンに共通する
力のデータを奪い取る。奪い取られたフェレスモンは強制退化、ブ
ギーモンとなつてしまつた自分を嘆いてかピクリとも動かない。

しかしこの力をこのまま自分のものにしても面白くない。俺は力
なら有り余つているわけだし、フェレスモンの力が加わつたところで
全体から1%伸びるのかも怪しい。

「行け。もう二度と俺の前に姿を現さないようにな？」

俺が頭から手をどけて優しく語りかけてやるとブギーモンは今度
こそ本当に怯えた様子で慌てて飛び去つて行つた。

ふと気づくとフェレスモンじやなくなつたからかピッドモンとエ
ンジエウーモンが石像ではなくなり生身に、磔にされていたデジモン
達も黒い十字架がデータの塵と化したために地面に落ちている。景
觀としては助ける前の方が良かつたのかもしれない。

ピッドモンは頭が無く、絶命しているためかすぐにデータの塵に還つたがエンジエウーモンは流石に完全体なだけのことはあり、どう手を尽くしても死ぬことは間違いないがまだ喋つたりするだけの余力があつた。

「……まさか、魔王に助けられるとは、思つていませんでした。」
エンジエウーモンは何とか仰向けになりこちらに顔を向けてそう切り出した。

「俺は助けていない。お前はもう死ぬ、助けることもできない。それに俺はスープが飲みたかっただけだ。」

「ふふふ……はあつ、私のことじやつ、ありません、ピッドモンはもちろん、あの磔にされていた子達もつ……データを消耗しすぎてますから助かりませんしね。」

普段騒がしいだろう幼年期も成長期ももう喋る気力も無いらしい。

「……くつ、は、そこにいるキュピモンのことです。」

キュピモンはいつの間にか俺の肩にぶら下がるようにしがみつきエンジエウーモンを見つめていた。

「助けたつもりはない。たまには他人と飯を食べるのもいいかなと思つただけだ。」

そしてその結果変なことに巻き込まれた。

「嘘ですね……私にはわかります。あなたは優しい人です。」

魔王の俺に優しいという表現を使うやつは非常に珍しい、いなかつたわけではないが片手で数えられるぐらいしかいなかつた。

「俺が優しい？」

「はい、くうつ……スープは、はつ、後は味を調えるだけの状態で家の中にありますっ……お礼に、差し上げっます……」

エンジエウーモンの体にノイズが走り出す。死の予兆だ。

それを見てちょうど面白いことを思いだしたのでベヒーモスに積んであつたオリーブオイルを取り出す。

「キュピモン、手を出せ。」

キュピモンが出してきた手にオリーブオイルをかける。
「エンジエウーモンに塗つてやれ。」

食に関係なかつたのでうろ覚えなのだが、オリーブオイルはある宗教では神聖な油とされているらしい。葬式なる死んだ人間を葬る式典で塗つたりもすると聞いた。

キュピモンは無言でエンジエウーモンにオリーブオイルを塗つた。幼年期なりに感じことがあるのだろう。

「あり、がとう・・・キュピモン。ベルゼブモン、こつ、この子をよろしくお願ひします・・・」

エンジエウーモンは逝つた。これだけの量喋らなければ碟にされていたデジモン達よりも生きていたからおそらく成熟期まで進化する。たのだが天使は大体そうやつて無駄に頑張つて死ぬ。

とりあえずフェレスモンの力をどうしたらいいかだけはわかつた。キュピモンをよろしくとは言われたが一から十まで面倒を見る気は無いしそんな義理は無い。

成熟期まで進化させてしまえば一人立ちできる。完全体が一世代退化する分の力を与えるのだからおそらく成熟期まで進化する。エンジエウーモンが消えていつた空間を見つめるキュピモンの頭に手を置き力をインストールする。

予想通りキュピモンは姿を変え出し身長も高くなり赤い布を頭に巻いた金色の四枚の翼を持つ女性型の天使に姿を変えた。

俺は同じ種類のデジモンと何度も戦つたことがあるのでその名前を知つていた。

「ダルクモン。」

呟くとダルクモンはなに?と外見に対して幼さを感じさせる首の傾げ方をした。

世代が上がるとデジモンとしてのスペックが上がるから頭自体はよくなるが精神的に向上する訳ではない、精神的に向上するには時間が必要になる。すつかり忘れていた。

結局何の解決にもなつていない。ダルクモンの頭もそうだし碟にされていたやつらは今まさに生死の境をさまよい迷つている。

・・・俺もダルクモンも傷を癒す力はない。
・・・考えてもしようがない、とりあえずはスーパード。

一番大きな教会のような建物の鍵は壊されていたが中は綺麗だった。

多分エンジエウーモンはここに避難させてフェレスモンと戦つていたのだろう。ダルクモンはその後幼年期、成長期を探すフェレスモンから隠れきつて逃げたのかもしれない。

少し空気を吸い込むと普通のスープの匂いがした。特別美味しいといふことは無さそうだがまあいい。

匂いを辿りスープの入った大鍋を見つけた。暴食の魔王とは言えこれではとても食べきれない、ダルクモンに手伝わせても無理だ。仕方ないので碟にされていたやつらにも協力してもらうことにした。

幸い大量の食器もすぐに見つかったので碟にされていたやつらの方に大鍋と食器を持つていく。

なんとか動けるやつには自分で飲ませ、動けないやつは口に流し込んだ。

最初の一 口で何体かは気が抜けて安らかな表情で逝き、他のやつらも順次データの塵になつて消えていった。

大鍋にはそれでも大量のスープが残つていたので俺とダルクモンが飲む分だけ残してエンジエウーモンとピッドモンがいたところにかけたた。

少しだけ引っ掛けつていたデータの塵が洗い流された。

「ベルゼブモン・・・」

残つたスープの内自分の分を飲んでいたらダルクモンがだらだら涙を流しながらこつちに話しかけてきた。

「エンジエウーモンのスープしょっぱいね。」

しょっぱいわけがない。エンジエウーモンがどれだけ濃い味か好きだったとしても野菜だけを煮込んだスープに塩気はない。これら足される筈だつたのだろうが面倒だったので何もしなかつた。

「そうだな、しょっぱいな。」

でも泣くダルクモンを見ていたら何故かしょっぱく感じてきた。

嫌なしょっぱさだったのでなにかしようと思つたが生憎手元にあ

るのは手持ちの固いパン、干し肉、塩や香辛料、教会内部からいただ
いた柔らかいパンと水、葡萄酒、そしてオリーブオイルだけだった。
仕方なく俺は泣きじやくるダルクモンを見ながら美味しいとは言
えないステップを飲み干した。

その後、その小さな村には誰も住んでいない。しかしそこに誰かが
いた証として小さな教会に大きめの石に荒々しく言葉が刻まれた碑
が一つポツンと置いてある。

パーソナルエクストラーメンの物語。

たまには他人と食べる飯も悪くない、そんな理由で拾つたはずだった。すぐ近くの町にでも引き渡せば面倒見てくれるだろう、そんな軽い気持ちでいた。

「ベルゼブモン、おなかすいたー。」

確かに嫌なしょっぱさを味わつたりもしたがそれでもリアルワールド式の味付けのサンドイッチをうまそうに隣で食べられて自分の持つてゐる普通のサンドイッチまで普段よりうまそうに見えるという効果を上げ一応成功はしたと思つた。しかし流石にこうべたべたと懐かれるとうつとおしい。

そう思つてつい昨日寄つた街を後にする時に誰かダルクモンを引き取つてくれる奴がいか探してみたが誰も引き取つてはくれなかつた。よく考えれば当たり前だ、暴食の魔王が連れている天使だなんて怪しすぎるしそれに世話が必要な成熟期というのも訳が分からぬだらう。

「一体どうしたらこいつは俺のところからいなくなつてくれるのだろうか。」

「ベルゼブモーン?」

ダルクモンは俺の尻尾をこねくり回して引っ張つて反応を求めてくる。尻尾は結構纖細で痛覚とかも少なくないんだがこいつは何度言つても尻尾を弄る。

「尻尾を弄るのやめろ。バイクの操作ができなくなつても知らないぞ。」

俺の愛車ベヒーモスは並のデジモンには乗りこなすことなど不可能で弱い乗り手ならその意識を取り込んでしまう化け物、俺と同じようく孤独なところが気に入つて乗つているが未だに時々俺をも振り落とそうとして来る。そんな時には尻尾でバランスを微調整する必要があつたりするのにダルクモンが弄つてるとそれができない。

「でもそしたらぼく普通に落ちちゃうもん。背中に抱き着いちやダメだつていうしー。」

こいつは頭の中が成長期程度で止まっているらしい。しりから生えているから尻尾なんだ、背中にべつたり引っ付かれていたら結局まともに尻尾を使えない。それに奥の手が使えなくなってしまう。

「当たり前だ。」

「ところでベルゼブモン、おなかすいたー。」

また戻った。こんなのを何体も何体も世話していたと思うとあのエンジエウーモンはなかなか尊敬に値する奴なのかもしない。

「・・・そろそろ町だから少し待て。」

町に行つたらとりあえず飯屋に入ろう。ダルクモンを拾う前の前の町で手に入れたグリーンマカライトの鉱石の残りを金に換えれば飯代とダルクモンの当分の生活資金ぐらいはまかなえるだろう。

「むー・・・」

ダルクモンが尻尾の先をぐりぐりし出すが無視する。本音を言うと少し痛いのだが魔王が天使に遊ばれているだけで十分おかしいのにこれ以上不名誉な姿は見せられない。

何かが変わったな。町を一見して前に来た時と何かが違うことに気が付いた。

数年前よりも町にも人にも活気がある様だ。静かで少し寒い風が吹く中で綺麗な夜空を見ながら食べる細い麺の入ったスープがうまかつた記憶があるので街灯が立ち並び建物も高くなつた。空も狭くなつたし風もうまく通るか怪しい。

まあこの程度は旅しているとよくあること、気にかけることすら馬鹿らしい。

「ベルゼブモン、どこでご飯にするのー？」

俺が引くベヒーモスの上に座つてダルクモンは無邪気に尋ねてくる。前の町の時に注意したのになんでこいつは聞いてくれないのだろう。そんなに難しいことを言つただろうか？面倒事にならないようベルゼブモンと呼ぶなどだけのことなのに。

「・・・ああ頭痛くなつてくる。」

「ベルゼブモン頭痛いのー？」

こつちの気持ちも知らないで仮面の上から俺の頭を心配そうに撫

でてくる。とつとと誰か引き取ってくれればいいのに。

換金した金は思つたよりも高値だつたものの物価がそれ以上に上がつてしまつてゐる。とりあえず間違いなさそうな定食屋に入つてみる。

魔王ということがダルクモンのせいでばれてしまつてゐるからか妙に接客がいい。ただビビられながら食べるのにはあまり趣味じやない。

「ベルゼブモン。何食べてもいいの？」

「ああ。」

面倒だから放つておいてメニューにさつと目を走らせる。値段はこの町にしては安い方だ、十分手持ちでまかなえる。

俺は生地で肉を包んだものが入つてゐるスープを頼む。スイギョウザと言うらしい。ダルクモンもいろいろ迷つた挙句俺と同じのを頼んだ。一緒に何かしたいという意識が強いのは天使デジモンの特徴だ。そうしておせつかいをして無駄に頑張つて死ぬ。

すぐに運ばれてきたのだがすこし残念だつた。すぐに提供できるのを目指したためなのかよくわからないがこの生地で肉を包んだものをスープに入れたまま煮込んだらしく生地の弾力が失われてしまつていて中身の餡が美味しいのに食感が悲しい。それでもまずはくはないのだが美味しいかどうかと言えば美味しくないということになる。

目の前のダルクモンは素直ゆえにこういう時にめんどくさい。

「ベルゼブモン。べちゃべちゃだけどあんは美味しいね。オリーブオイルかけたら美味しいかも。」

こうやつて言いにくいくことまでバツチリ言つてしまふ、一緒にいるのが魔王じやなかつたら店の外に放り出されても仕方ないような面倒な素直さだ。

「・・・そうだな。スープもうまいけど確かに生地は残念だ。オリーブオイルはやめておけ。」

どうせ魔王だとばれてしまつてゐるわけだしもうどう転んでもいいだろう。

だがこれでも暴食の名を持つてるので全部完食しダルクモンにも完食させてすぐに店を後にした。

「これからどこ行くのー？」

相変わらずベヒーモスの上に座るだけで歩こうとしないダルクモンがついにベヒーモスの上からベヒーモスを押す俺に器用にもたれかかってきた。絶対その体勢の方が辛いだろうにそんなにくついていたいのか

「俺の昔のなじみだ。だいたいこの町の近くにいる。」

ダルクモンをどうやつたら引き取つてもらえるか、考えてみれば簡単なことだ。

引き渡してくるのが魔王じやなくて聖騎士だつたらどうだろう？怪しい奴から可哀想な子になり保護欲をかきたてられるようになるだろう。それも世界最高のセキユリティ期間ロイヤルナイトの一員で災厄を体の中に封印し続ける紅蓮の騎士が預かつて欲しいと頼んだら快く受け入れてくれる筈だ。

「なじみつてー？」

とうとうベヒーモスから降りて背中に抱き着くような形になつたダルクモンが耳元で聞いてくる。まだベヒーモスに乗つてくれた方が楽だつた。魔王である俺にとつて大した重量ではないがそれでも筋肉は凝つたり張つたりして疲れる。

「知り合いつてことだ。乗るならベヒーモスに乗れ、乗らないなら歩け。」

「やだ。ベルゼブモンあつたかくて落ち着くもん。」

あつたかい。暴食の魔王、この世界を呪うことを宿命づけられた俺に対してもつたかいという言葉は絶対に違う。それが体温のことを表していたとしても冷酷で残虐であるはずの俺には似合わない言葉だ。

しかしダルクモンを力づくで引っペがしてもすぐにまた引っ付いてくるだろう、俺に諦めさせる方法は無いので俺が折れることにする。

そんなこんなで町を少し離れて小さな教会へ向かう。小さい教会

ではあるがそれに似合わない巨大なエネルギーが俺に向けて重圧を放つてきている。俺はそれに今日は喧嘩をしに来たわけじゃないことを伝えるためにちよつと苦しいが体が反射的に放出しているエネルギーを抑える。

「っ・・・!?

ダルクモンが一瞬苦しそうにしたのですぐに元に戻したがこちらの意図に気づいたらしく溢れだしていた敵意が引き教会の扉が静かに開いた。

「どうしたベルゼブモン、喧嘩以外の目的で来るなんて珍 s・・・」
教会の中から出てきた紅蓮の騎士、デユークモンは本来俺の天敵、邪惡の頂点の俺と神聖の頂点のデユークモンは真逆の存在だがこいつは昔からのなじみのせいか何故か俺に馴れ馴れしい。

「・・・そうか、今日は喧嘩では無くて戦争だったか。ならば今日の俺・・・いや、私はロイヤルナイツとして責務を果たし魔王ベルゼブモンの首を討ち取ろう。」

デユークモンは威厳を保つためキャラを作っている奴なのは知つていたが俺の前では普通のフレンドリーなバカだった筈だ。ロイヤルナイツとしてのキャラで殺気を放つてきたことなんて数えるほどしかない。

「どうしてそうなった。今日は喧嘩も戦争もする気なんてねえよ。」「ならばその背中に抱き着いてるダルクモンはなんだ。モテない我に対する皮肉だろう! スレイブモンといいお前といい・・・リア充なんて、リア充なんて・・・ファイナルエリシオン!!」

半ば呆れている俺にデユークモンは構えた聖盾イージスの中央から純白の光を放つた。その威力のすさまじさはおそらく誰よりもこいつと戦ってきた俺が一番わかっている。正面から受けると俺でも腕の一本消し飛ぶのは覚悟しなければいけない。

「獣王拳ッ!!

ベヒーモスから右手を離し纏つた獅子の形をしたエネルギーを撃ち出す。俺の種族が本来持つている技でもないし咄嗟のことなので相殺なんてことはできない。少しでも着弾までに隙を作るために

やつた。

その時間を使ってベヒーモスは自力で逃げ出し俺はダルクモンを背中から前に抱えると奥の手を使つた。背中からぐちゅりと生える一対の黒い翼。それを使って宙に逃げる。

「べ、ベルゼブモン？」

お姫様抱つことか言うのをすることになつてしまつたが何とか避けることに成功した。俺だけならあそこから受け止めることも不可能じやなかつたがダルクモンが余波でダメージを喰らう可能性があつた。

「・・・デュードクモン。本当にどういうつもりだ？」

流石に急に殺しに来られたら怒りもする。決してダルクモンを巻き込みそうだつたから怒つたわけではない。

「だつて・・・俺もう数百年生きてんのに一度も彼女なんてできただことないしバレンタインにチヨコももらえないし・・・」

うなだれて槍を地面に突き刺すデュードクモン。どうやらこいつには俺とダルクモンは付き合つてているように見えるらしい。そういうこいつは頭の中は幼年期でも見た目は成熟期、知らなければそう見えても仕方ないか。

「こいつは事情があつて預かってるだけだ。ちょっと前までは幼年期だつたし俺の好みじゃない。」

そもそもデジモンに性別は無い。人間達から持ち込まれた恋愛という概念は知識として知つているものの俺はしたことではない。だからそもそも自分の好みもわからぬ、一人の方がよっぽど楽だし。

「幼年期から自分好みに育て上げて いる途中だと・・・？」

「違う。」

昔から思い込みの激しい性格なのは知つていた。俺のことを優しく表現する数少ない奴の一人なぐらいだからこいつは相当変だ。

「とにかく幼な妻か・・・くそ、羨ましい。」

「俺はこいつのことを何とも思つてない。もちろん好きでもない、養うのにも金が要るし俺が魔王だということを街中で平気でばらす面倒な奴だ。」

そうかとデューケモンが納得しかけた時にダルクモンが余計なことをし出した。

「ベルゼブモン、ぼくのこと嫌いなの？僕はベルゼブモンのこと好きだよ？」

そう言つて俺の首に抱きついて頬ずりをしてしまつた。

「よろしい、ならば戦争だ……」

デューケモンの槍の先が青白い光を纏いだす。デューケモンの持つもう一つの技、ロイヤルセイバーの前兆だ。

「落ち着け、ガキが保護者を好くことぐらい変なことじやないだろ。」

「幼な妻でピュアでぼくつ娘それだけの逸材を一体どうやって……」

俺にはよくわからない言葉で褒められているダルクモンは頬ずりを続けていた。流石に長時間はうざつたらしいので地上に下ろしてもう一度飛びあがる。

「知り合いがこいつのいた村を滅ぼしてスープを飲めなくなつた。それでそいつをぶつ倒したらこいつのことをエンジエウーモンに任せられ、面倒だつたから知り合いの力をこいつに注いで進化させた。」「……OK、流石に冷静になつた。すでに公認ということは俺は結婚式の仲人でもやればいいのか？」

「違う。」

「ベルゼブモン、ぼくお嫁さんやつてみたい！」

デューケモンの盛大な勘違いにダルクモンが乗つてしまつて飛びあがつて俺の首にまたぶら下がる。

「ピュアな上に可愛すぎるだろ。もう精神だけで口リと言えるレベルだぞこれ。口リコンめ、さすがにファンに愛想尽かされることになるぞ。」

また憎々しげな様子なデューケモンがまたよくわからない言葉で俺のことを罵倒してくる。

「俺にファンなんていないだろ。」

そう言つたのは面倒だつたからだつたがどうやら失言だということに

とがデューコモンの表情から容易に分かつた。

「お前のその悪ぶつてていながらところどころで見せてくる優しさにファンになるデジモンがどれだけいると思つてるんだ。俺のファンはだいたい戦闘馬鹿かいきすぎたイグドラシル崇拜者しかいないんだぞ？その点お前は……お前は……女性型デジモンにもいっぱいファンがいて中には俺のところにお前宛のラヴレターを渡してくれと頼みに来るものまで……まあだいたいこつそりファイナルエリシオンで処分しているが……」

一応愛情は尊ばれる感情だつた筈だ。それを踏みにじる奴が聖騎士な世界はろくな世界じゃない。寄つてこの世界はろくな世界じゃない。

「それに最近はスレイプモンの奴までもが彼女作りやがつて……俺達ロイヤルナイツの鉄の盟約を奴だけは破るまいと思つていたのにまさか四大竜が一体ホーリードラモンとこつそりと密会を続けて盟約を破ることになるとは思つていなかつた……」

思いつきり拳を握り熱弁するデューコモンを俺は冷めた目で見つめダルクモンは不思議そうに見る。教育上のことを考えると見せないようになした方がいいのだろうか？

「魔王の俺が心配するのも変ですがロイヤルナイツって大丈夫なのか？」

こいつらは一体どんな盟約を結んでいるのか。

「お前が気にするな……で、式はどこで上げるつもりなんだ？」

「お前はいい加減それから離れる。」

それから小一時間ほどかけてデューコモンに事情を全部説明し終るとデューコモンは承諾してくれた。
「約束だからな！俺に彼女ができるまでお前も彼女作んないって!!
それがダルクモン引き受ける条件だからな!!」
「わかつたわかつた。」

「人々恋愛に興味なんてない。色々面倒なだけだ。」

「できればかわいい子の紹介もしてくれると……」

「ダルクモン口説けば……いや、やっぱりそれは駄目だな。」

デューエモンは悪いやつじゃない、お人好して俺のことを優しいと表現する馬鹿野郎だ。だがダルクモンを任せられない、魔王の俺がエジエウーモンに罪悪感を抱くはめになる。

「……そういうええ、ダルクモンと会う二つ前に行つた街で騎士の募集をしているというバステモンがいたな。」

バステモンは獣人型だが美形には違いない。きつとこの変態なら食いつくだろう。

「それならエグザモンが行つて撃沈した。大きすぎて駄目なんだとか、力がありすぎるのも問題だな、それに俺ケモミミ属性はないんだ。」

エグザモンは島かと見紛うほどの巨体を持ち、ロイヤルナイツでも別格のサイズ。俺がバステモンの立場なら連れ歩きたくはない。力量の差が大きいとかではないと思う。

「オリンポスのディアナモンがこの前……」

「あの人は先週アポロモンと付き合いだしたよ！告白の言葉は俺が君を照らすから君も光つてくれだつてさ！」

「ガキがいいんだつたらオリンポスの……」

「ミネルヴァモンは最近アルフォースブイドラモンといい感じだよ!!頭の中ガキだから話が合うんだつてよ!!」

・・・駄目だ、どうしようもない。

「……」

デューエモンがダルクモンをじつと見つめる。俺にとつて最悪の方向に話を進める気らしい。

「……ダルクモン、さん？」

「なーに？」

「よかつたら俺と一緒に……」

「何かやるならぼくはベルゼブモンと一緒にいい！」

まあこうなるとは思っていた。ガキは保護者になつき、甘えて反抗期を経て独り立ちする。ここにいたのが誰でも同じようにダルクモンはしただろう。

「……おい、睨むなよ。リリスモンのばあ……姉さん紹介してや

るから。」

「いや、リリスモンのばあ・・・姐さんはコロコロ男殺すじゃないか。
俺まだ死にたくないんだけど。」

「大丈夫だ。ばあ・・・姐さんは癪癥持ちなだけで本気で殺そうとしてないからただの完全体究極体ならいざ知らず、ロイヤルナイトのお前なら耐えきれる。」

「あのばあ・・・姐さんの腐蝕はイージスでも耐えられるか怪しいんだけど。結婚がリアル人生の墓場っぽいんですけど。」

こうなると俺に紹介できる女性格のデジモンはない。自慢ではないが知られはするものの俺が知るデジモンは少ない、知り合いはより少ない。

「・・・ならもう無理だ。」

「じゃあこの話は無かつたことにしてくれ。ダルクモンはお前が一生世話してろ！ そうすれば子持ちになつたお前は人気大暴落だしな。バー！カバーカ！」

デュークモンは俺にべたべたくつつくダルクモンを羨ましそうに見ながら涙を流して笑い出した。俺自体は恋愛に興味はないが恋愛ができなくなるのがそんなに面白いのだろうかこの聖騎士は。

「ねえねえベルゼブモン。なんか町の方が騒がしいよ？」

ダルクモンが俺の翼の付け根を触る手を止めて話しかけてきた。確かにさつきまでとなんだか違う雰囲気があるし俺やデュークモンの物とは比べるべくもないが殺氣が放たれているのも感じる。

「少し出て来ねばならないようだ。」

立ち上がり槍を構えたデュークモンの表情はさつきまでとはまるで違う。ロイヤルナイツとして聖騎士として魔王の宿敵として相応しい凜々しく神々しいものだつた。

ダルクモンですら少し緊張したような表情になる。俺はそんな必要は無いとダルクモンの頭を軽く撫でて翼を収めて立ち上がった。

「俺も行く。この前来た時に美味しい店を見つけてたのを思い出した。確かお前が紹介してくれた店だつただろ、ついでに案内しろ。」

素直じやないと呟いたデュークモンの頭を軽く小突いてベヒー

モスに跨つた。すると当たり前のようにダルクモンが後ろに乗つた。
どうせ聞かないだろうと思つたので一緒に連れて行くことにした。
デュードクモンにはもしかしたら何か危険があるのかもしれないが俺
達はただ美味しい店を紹介してもらうだけ、できればその店でダルクモ
ンの世話をもしてくれると嬉しいがとりあえずダルクモンを連れてく
不都合はない。

町のデジモンを引かない程度の速度でベヒーモスを走らせる。
デュードクモンは翼も無いのに何故か飛べるので気にすることはない、
多分マントに何かあるのだろう。一度マントを爪で裂いたら飛べな
くなつたことがある。あの時の喧嘩は俺の勝ちだつた。

愚かな奴だな。状況を一目で把握して俺はそう思った。

「それ以上近づくんじゃねえ!!」「いつを殺すぞ!!」

確かサゴモンとかいう種族のデジモン、幼年期のピチモンとかいう
デジモンの首根っこを掴んで周りに怒鳴り散らしている。完全体
だつた筈だから軽く力を入れられれば簡単にピチモンは殺されてしまふ。

そんなことは俺には関係ない。ただ店を紹介してもらうためにこ
こにいる。強盗を止める為じゃない。

「我が名はデュードクモン！サゴモン！ピチモンを解放し武器を捨て
投降しろ!!」

デュードクモンが野次馬連中を押しのけて一步前に出る。いかにも
ロイヤルナイトな風格でさつきまでのデュードクモンとは一切重なら
ない。

「うるせえっ！俺はシャウジンモンだ！！とつと下がりやがれ！！い
くらロイヤルナイトでもこれだけ距離離れてたら俺が殺す方が早い
ぞ！！」

「ぐうつ・・・」

だがロイヤルナイトだからこそデュードクモンは手を出せない、ピチ
モンの命を優先しなければいけない立場にある。だから組織には属

したくない、この意見を表に出しづらくなる。

さて、最終的にはデューコンが勝つのはわかっている。ピチモンを殺さない限りデューコンは手を出さないが気づかれないよう追いかけ続け、殺したらすぐに行動に出るに決まっている。

とりあえず待つてやるか。そう思っているとダルクモンが俺の袖を小さくつかんで引っ張ってきた。

こんな状況でも甘えるのかと思つて振り向くとそこには顔を真っ青にしたダルクモンがいた。

「ベルゼブモン、ダメ。死んじやう、逃げよう？」

俺が黙つて首を振るとダルクモンは俺の何倍も激しく首を横に振つた。

「ベルゼブモン。エンジエウーモンの時と同じだもん、プニモンが捕まつてエンジエウーモンもピッドモンも攻撃できなくて・・・」

そういうえば人格は育つていなくとも知能自体は上がつている。あの時はよくわかつていなかつたことも今はわかつてているのだろう。それで、今の状況があの時に似ていると、だから逃げようと言つているわけだ。

全くもつて俺にはどうでもいい。俺はダルクモンの手を引っ張りながら頭を軽く小突いてベヒーモスから降りた。

「おい。迷惑だ、そういうことは余所でやれ。」

人ごみを搔き分け、デューコンを後ろに追いやつて俺は先頭に立つ。

「てめえなんなんだ!!」

「暴食の魔王、ベルゼブモン。」

シャウジンモンに俺は丁寧に答えてやる。俺の顔は他の魔王に比べると好き勝手やつているから知名度に大きな地域差がある。それでもかなりの知名度を誇るしここはデューコンと意味も無く喧嘩することもあって名前を言われば気づかれる程には知られている筈なのだがシャウジンモンは軽く笑い飛ばした。

「お前がベルゼブモンなわけねえだろ! デューコンと犬猿の中で周囲に近づくデジモンは全部喰らい尽くすつて聞いたぜ!?」

「仲は悪くない。デューケモンが彼女募集中なのを知ってるぐらいには仲がいい。」

俺が適当に返すと野次馬のデジモン達から逃げ出すデジモン達が現れた。半信半疑な奴や怖いもの見たさ、後デューケモンの衝撃情報を確かめたいやつらは残ったが半分近くは逃げ出した。

「ベルゼブモンの名前出せば諦めるとでも思ったのかよ!! 馬鹿が!! 本物だつてならデューケモンの顔面殴つてみろよお!!」

ちらりと後ろを見るとダルクモンは口をパクパクさせながら震えていた。心配なわけじやないがあのダルクモンと一緒に食う飯が美味しいわけがないしデューケモンがいないと美味しい店がどこにあるのかわからない。

——バンツ

俺の撃つた銃弾がシャウジンモンの頬を掠めて壁に突き刺さる。思つたよりも小物だ、反応すらできていない。デューケモンが槍で突きに行つたとしても多分反応できないだろう。

「お前、勘違いしてないか?」

「て、てめえ!! 次やつたらコイツ殺すぞ!! 銃下ろしやがれ!!!」

シャウジンモンが何とも形容しがたい微妙な武器を振り回しながらピチモンを掲げた。ピチモンが小さくか細い声で助けてと言つて涙を流しているのが確認できた。デューケモンが場合によつてはお前を攻撃するぞと目で語つてきたが無視した。

「俺は迷惑だと言つただけでそいつを助けたいとは言つてない。俺の連れが怯えてまともに飯を食べられない、騒がしいここでの飯はあまり好きじやない。だから静かにしろ。」

シャウジンモンはダルクモンみたいに口をパクパクさせて何もできなくて固まつていた。相変わらずデューケモンはこつちにプレッシャーをかけていたがやつぱり無視した。

「お前がそいつを殺すより前にお前を殺すのは簡単だ、デューケモンも仕方なかつたと言うだろ。俺は静かになり怯える必要のない町で連れと美味しい飯を食べられる。これは最後のチャンスだ。三秒以内に投降しろ。」

結果としては三秒もいらなかつた。シャウジンモンはすぐさま武器を捨てて平伏して震えだした。野次馬共がいろいろ騒ぎ立てたが俺は静かにしろと言つたと言うと静かになつた。

「おいダルクモン。もう大丈夫だ、怯えるな。」

ポンポンとダルクモンの頭を叩いてやるとブワッと泣いて抱きつきだした。俺は抱きつかれたままヒーモスに跨り、デューコンに合図した。

「少し待つていろ。私はこのシャウジンモンが逃げられないようクロンデジゾイト製の手錠と足枷をはめてくる。三分で戻る。」

デューコンはシャウジンモンを抱えてふわりと飛びあがつてこつちを軽く見下ろしながらそう言つた。

「一分だ。お前の仕事を簡単にしてやつたんだからもう少し頑張れ。」

ダルクモンはずつとぐすぐす言つている。鼻水とかついたかもしないがまあいい、飯さえうまく食えればいい。デューコンが飛び去るとおもむろに距離が取られるようになつた。俺は魔王だから避けられて当たり前、むしろそうやつて避けて欲しいぐらいだ。

そうしているとふと気づいた。どうしていいのかわからないようでも果然としたピチモンに誰も寄つて行かない、それどころかほとんど見もしない。デジモンは生殖行為を行わないから誰の子供でもない、エンジエウーモンみたいな物好きがまとめて町単位村単位で育てることが多い。一匹だけで周りに物好きっぽいのもいらないということは風にでも流されてきてしまった迷子だろう。

俺はダルクモンの頭をもう一回ぽんと叩いてピチモンの方に歩いていった。

「おい、偶然とはいえた助けてやつたんだ。もう少し嬉しそうにしろ。」

「ダ、ごめんなさい……」

ピチモンは俺に怯えていて視線がきよろきよろと動く。まあ俺は魔王だからこんなもんだ。

「嬉しそうじゃないお前の顔が飯食つてる時にチラついたら飯がま

ずくなる。来い。」

ピチモンの顔が驚きの表情に染まつて言われるがままに俺の肩に乗つてくる。

そこにちよどデユーグモンがやつてきて俺が店の特徴を言うとあの店なら場所を変えたんだと言つてそそこの高さの建物の最上階に連れて行かれた。ベヒーモスはデユーグモンに持たせて上がつてみると昔見たままの屋台の店が屋上にあつた。空が綺麗に見える場所で少し風が心地よく、下の騒がしさも届いてはこない。

「前来た筈だが覚えてるか？」

デジタマモンに呼びかけるとデジタマモンはこくりと頷いてご注文は？と聞いてきた。

「ちなみに俺のお勧めは醤油ラーメンだ。」

そう言つたデユーグモンが醤油一つと言うとデジタマモンはへいと言つてラーメンとかいう細めんの入つたスープを作り出した。

「前に俺が食べたのがどれかわからばそれを頼む。」

俺は前に喰つた時の記憶よりも美味いとは限らないとも思つたがなんとなくだけれど今喰つた方が上手いに違ひないという変な確信があつた。

「塩ですね。」

「あれは美味かつた。ダルクモンとピチモンにも同じのを頼む。」「美食の魔王様にそう言われると光榮です。」

「俺は暴食の魔王だ。」

コイツもシャウジンモンみたいなやつなのだろうか。來たことを覚えているのに種族が覚えられていないというのはあまり気分のいいものではない。

「すみません、我々食品業界での通り名なんです。ベルゼブモン様が美味しいと言つた店は潰れることはないと言われています。」

デユーグモンが少し気まずそうだつたが気にしない。完全に立ち直り楽しみにしているダルクモンと控えめに嬉しそうなピチモンはきつと美味そうに食べる、うまそうに食つている奴がいると自分の分までより美味そうに見えてくるから不思議だ。

「まずデユーラーメン様、そしてベルゼブモン様です。」
ラーメンが二つ目の前に出される。記憶と寸分違わない美味そうな出来だ。

「その塩はピチモンに先にやつてくれ。」

「へい。」

「次はダルクモン、俺の分は最後でいい。」

ピチモンが遠慮がちにちらちら見てきた。ついでにデユーラーメンも。

「それは俺が美味く食べるためにお前に喰わせてる。俺のために喰え。」
デユーラーメンは無視した。仮にも世界最高のセキュリティ機関ロイヤルナイトの一員、世話をやってる理由は無い。

「う、うん。」

最初はちびちびとだつたが美味しかったみたいでピチモンは次第にがつつきだしていた。そのうちダルクモンがピチモンがあまりに美味しそうに食べるからデジタマモンがラーメンを作る様子をちらちらと見るようになつて来た。

そのまますぐ後、デジタマモンが俺とダルクモンにもラーメンを出した。ピチモンが美味そうに食べていたからか最初に出されたのを見た時よりもより美味しそうに見えた。
あっさりしたスープと喉に吸い込まれていく細麺。頬を撫でるひんやり冷たい風と綺麗な星空のおかげもあってか疲れが癒され、自然に溶け込んでいくような気さえする。

「ベルゼブモン、美味しいね！」

そんな空氣はダルクモンにあつけなく崩された。でもこいつが隣で笑つてるのも悪くない。

「そうだな。また喰いに来たいもんだ。」

「また来てください。」

「こつちも美味しいぞ、ちよつとスープ飲み比べてみろよ。」

デユーラーメンがダルクモンにれんげという奇妙なスプーンにしようゆベースのスープを入れて差し出した。

「おい、ダルクモンを餌付けるな。」

「お前が言うか美食の魔王様が。」

「ベルゼブモン、ケンカはダメだつてぼくでも知ってるよ。」

「う、うん。」

「あっしとしても仲良く美味しく食べていただきたいです。」

これだけ大人数でもやっぱり美味しいものは美味しい。余計に美味しい。

魔女のステップの物語。

迷いの森。デジタルワールドに数ある森の一つで、ありとあらゆるもののが迷い込んでくる。迷つた者達の終着点とも言われていてその内部には多種多様な外来デジモン達のみからなる奇妙なコミニュティが作られているとも・・・

私はそんな森の中央、静かな泉のほとりに一つの小屋を建てて暮らしている。いわゆるこの森の主とかさらには何故か処刑人とまで言われる立場だがあんまりそういう器でも柄でもないと私は思つてるので言われる度に否定しているんだけど一向に収まらない。

「ねークロスモーン、ご飯まだー?」

下半身が煙になつている獣のデジモンが私の金属で覆われた体をコンコンと叩きながら聞く。

「後三十分ぐらいかな、バクモン。」

私はミドリデジタケの石突を爪で切り落としながらお釜の方の火加減を気にする。こここの近くではみんなパンを食べるが私は大陸出身じやなくて遠い島の出身でその時からパンよりも米を食べている。といつても森の中で米は手に入らない、なじみの商人が月に一度大量のお米を格安でくれる。この前聞いたらロイヤルナイトのデュナスマン様がこの森を優遇しているらしい、彼は唯一この森の出身で私も面識がある。もう手の届かない人になつちやつたけど私のことを友人扱いしてくれる。

「じゃあ、今日の夜ご飯はなーにー?」

バクモンが私の金属製の翼によじ登りながら手元を覗きこんでくる。まあ流石にこれくらいで体勢を崩したりしないけど体勢を崩すデジモンは崩すのでやめてほしい。

「よじ登るのをやめたたら教えてあげるよ。もうやつちやだめだからね?」

「はーい!で、なーにー?」

私の翼から飛び降りてバクモンは私を見上げる。もう少し強く言わないとまたやるかもしけないけど怒るのは得意じゃない、楽しくな

いから。

「ミドリデジタケの肉炒めとデジタケの炊き込みご飯。」

この森の泉で取れる魚も選択肢にはあるのだけれど毎朝ご飯と焼き魚なので昼と夜は焼き魚にならないようしている。ただお米以外はこの森の中で取った物だけでやりくりするよう正在しているので自然とデジタケやミドリデジタケ、オレンジバナナ、あとニッコリングにデジジャコ、デジナマズ、デジコイぐらいを使うことになる。

調味料もあまり潤沢じやないのが少し辛いところだ、故郷にはあつた味噌か醤油が欲しい、塩か醤油かだけでも味や香りは変わつて来るのに。というわけで一年と少し前になじみの商人から聞いた魚醤とかいう調味料を作ろうとしてできた時のことを考えて一ヶ月ごとに一つずつ容器を増やしているのだけど・・・せつかくだし今日つかつてみようか。

「わーい！僕炊き込みご飯大好きー！」

調味料もケチつたデジタケのだし任せの薄味炊き込みご飯だけだとバクモンはとても喜んではしやぎまわつてている。少しやつぱり使おうか・・・と思つたところで大事なことを思いだした。濾す作業をやつてない、固形物を取り除いた液体が魚醤、まだ濾してないから使えなかつた。

「とりあえず他の子達も呼んできて、さつきも言つたけど後三十分ぐらいいだから。」

「はーい！」

バクモンがふわふわと浮きながら小屋から出て行く。他の子達と言つのはここに迷い込んできたデジモン達だ。少し前に何人か独立していったので今いるのはバクモンを入れても五人なのだけれど一時期は二十人超えてたこともある。

デジタケを爪で裂きながらちよつと色々と昔のことを思いだす。自然と頬が緩むような感じになるのは何故だろう。

「・・・気持ち悪いですよ、一人で笑うの。やめた方がいいです。あと女々しいです、料理してる姿がしつくりすぎます。」

「うーん、でもやっぱりいい思い出はニヤニヤしちゃうんだよ。」

「ウイッチモン。」

箒に乗った赤い装束の魔女、ウイッチモンは私に向けて箒を突きつける。彼女は七年前に独り立ちしていつたデジモンでもどもとウイッチモンの状態で迷い込んできたのだけれど彼女はバクモンみたいな進化前の小さい時に風に運ばれて迷い込んだデジモンじやない、異世界から迷い込んだデジモンだ。

この森は異世界ともつながりやすい。異世界から迷い込んでくるデジモン達にこの世界で暮らすか元の世界に戻るかを選択してもらう。ウイッチモンはこの世界で、特にこの森で暮らすことを選択した変わり者だ。だいたいは元の世界に帰ることを望むというのに、とうかウイッチモン以外ここに来たデジモン達は皆帰つて行つたとうのに。

「だからつてニヤニヤは気持ち悪いです。あと女々しいです。」

ウイッチモンは宙に浮いた状態から私を見下ろして辛辣なことをウイッチモンは無表情で言う。私は無表情に見えてしまう種族だけウイッチモンはわざと無表情を作つてる。

「まあそれで私が悪く思われてもどうでもいいし女々しくても気にしないよ。ところでウイッチモンはよく私の表情わかるね、よく無表情で怒つてる見たいって言われるのに。」

本当に不思議なのだ。バクモンもわからないし私自身泉に映しても違ひが判らないというのになんてわかるのだろうか。

「・・・ここにいた時、散々クロスモンの顔、見てたからですよ・・・でも、深い意味は無いですからね。勘違いとかはしないで下さい。本当に違いますから。絶対そういうのじゃないですから。」

何故か少し必死なウイッチモンだが深い意味つてどういうことなんだろうか、勘違いとかもよくわからないしそういうのつてどういうのだろう。

「ウイッチモンは家事全般手伝ってくれてたもんね、確かに私の顔を見る機会は多かつたようなきがする。」

私がそう言うとウイッチモンはその金属の外殻にはやつぱり感覚通つてないんですね。とか言つて魔術で浮かせていた大なべを私の

頭の上に落した。

それを私は普通に片手でキャッチしたのだけれどそれも気に入らなかつたみたいでウイツチモンは無表情のままだつた。

「ところで今日は一緒に食べてくんんだよね？」

ウイツチモンは鍋を持つてくるときはだいたいその中身はスープだ。私があまりスープを作らないので時々みんなの分も持つてきてくれる。

「クロスモンがスープを作らなくてかわいそうちから持つてきただけです。」

私がスープを作らるのは鍋を倒して火傷する子が時々出るからなのだけどそこは置いておく。

「まあまあたまには一緒に食べようよ。ウイツチモンがいた方がみんなも私も嬉しいし。」

そう言うとウイツチモンは少しだけ考えるような感じで私の顔色を窺つた。多分笑顔だと思うのだけど変な顔してたらどうしよう。

「・・・なら仕方ないですね。たまには一緒に食べてあげます。それとお釜、火から離して蒸らさなくていいんですか？焦げは美味しいですが焦げすぎはまずいですよ？」

そういえばと急いでお釜をかまどから外す。これで後に十分ぐらいうえらせば焼き上がり。このタイミングに合わせて炒め物を作つて、そのまま土鍋をはめていた場所にウイツチモンから貰つた大なべを置く。やっぱり若干冷めてしまつているから温め直さないといけない。

「本当にありがとうございますね、ウイツチモン。やっぱり魔法つて便利なんだね。」

「まあ私は特に水と風の魔法に精通しますから。でも誰でも覚えようと思えば覚えることはできます、こつちの世界のデジモンでも少しだつたらできますし・・・教えませんけど。」

ウイツチモン達にとつてこつちの世界では主に高等プログラム言語と呼ばれる魔法はウイツチエルニーと言われる異世界から来たデジモン達にとつては生きるための術だ。私達が奪つていいものじや

ない。

「教えてくれなくてもウイツチモンが時々来てくればいいよ。ところで炒める時手伝ってくれる?僕の腕は二本しかないから一度に全部炒められなくて……」

「はいはい、本当にクロスモンは仕方ないですね。ずっと来てあげますよと言つたウイツチモンは何故かヘビーアイチゴみたいに真つ赤になつてその状態のまま風の魔法で私が炒める分まで一気に炒めだした。

「わーすげえ! フライパンが浮いてるぜー!!」

どうやらバクモンがみんな連れて来たらしくてバクモンと一緒に薄い紫色の獣型のデジモンと緑色の皮膚の大型のデジモン、青いカブトムシのようなデジモン、そして歓声を上げたのが背中に何本も刃が付いた黄色いデジモンだ。

「ウイツチモンさん……こ、こんばんは。」

「久しぶりですね、ガジモン。クロスモンを落とし穴に嵌める作戦は成功しましたか?」

おずおずと話し掛ける紫色のデジモンにウイツチモンは視線を合わせて問い合わせる。ちなみにフライパンはふつたままである、魔法つて本当に便利。

「ううん……あ、あれからね、一週間で二百七十三回掘つたけど全部はまんなかつた……ギザモンが全部はまつたけど。」

「俺以外誰も引っかかるてないのかー?」

さつき歓声を上げたデジモンがガジモンに聞く。ギザモンは今週毎日泥だらけになつて泉に私の手で放り込まれた。終いには放り込まれるのが楽しくなつて自分からハマリに行つて放り投げろーと言つていたのを覚えている。

「……となると次の作戦です。何が何でもクロスモンを泥だらけにしましよう。」

「う、うん……」

ウイツチモンに頭をぽんぽんとされてガジモンはこくこくと頷く。内容がもう少しいことだつたら私も普通に喜べるのに。

「なあなあクロスモーン。今日も泥だらけだぞー！」

「はいはい、わかつたわかつた。それっ！」

ギザモンの背中の刃を持つて上段に上げ、窓から外の泉に向かつて放り投げる。おーと言う歓声を残してギザモンは泉の中に落ちる。自分で飛びこんでくれないかなーと思うけど成長期のギザモンだと窓から泉までは飛びこめない。

「・・・クロスモン。これって私のせいですか？」

「・・・間接的には、そうかもしねないけど。まあともとギザモンは水中と陸上を行き来するデジモンだから気にすることはないよ。」

つい私はバクモン達にそうするようにウイツチモンの頭をぽんぽんと撫でてしまった。これは間違いなく怒られる。

「あ、ごめん。」

「・・・何を謝つてるんですか？子ども扱いはいただけませんけどフオロー入れてくれたのはむしろ・・・あれです。」

少し顔をそむけて何かをぐによとウイツチモンが言つたのだがやつぱり悪いことをしたという気持ちは収まらない。

「いや、どろどろのギザモンを触つた後の手だつたから・・・」

勿論私の手にも泥が付いていたわけで、ウイツチモンの帽子にも泥が私の手の形にべつとりと付いてしまっている。

「・・・こんなものすぐ落ちます。気にしません。」

ウイツチモンが指を鳴らすと帽子は指先から溢れ出た水で洗われて風がその水を吹き飛ばして元通りどころか元よりもきれいになつた。

「次はクロスモンの番です。手を出してください。」

「いや、私は泉で洗つてくるからいいよ。」

「ダメです。泉の水には水生生物の糞とかも混じっています。ギザモンはいいですけどクロスモンはダメです。」

私はそれはギザモンが少し可哀想だよと言いながら手を強引に掴まれて洗われた。なんでか少しウイツチモンが嬉しそうだつたけど少しだけでも成功したからだろうか。

「じゃあ次は他のみんなも洗つてあげてよ？」

「……仕方ないですね。シャーマモンからこっちに来てください。」

呼ばれて緑色の皮膚の人型のデジモンがウイツチモンの前に出る。ウイツチモン、よかつたじやん成功してと言つてにやりと笑つたシャーマモンはウイツチモンに全身もみくちやに洗われて目を回した。多分手だけでも泥だらけにできたことを喜んでいたのだろうけど、照れなくてもいいだろうに。

「……ウイツチモン、照れなくてもいいのにね。コカブテリモン。」

私は何か手伝うことある?と聞いてきた青いカブトムシのデジモンに皿に盛つたご飯を渡しながらそう言つてみた。

「クロスモンのにーちゃんついに気づいたの?」

コカブテリモンはものすごく驚いたようでご飯を落としかけながら私の顔を心配そうに伺う。私はそんなにおかしな発言をしたのだろうか?

「でも私を泥だらけにして洗うのってそんなに楽しいのかな?……で、気づくつて何に?」

「にーちゃんはもう少し乙女^g……もがもが。」

「早く運びましょう、コカブテリモン。それと喋りながら運ぶと唾が入りかねません、やめるべきです。」

大きな手でコカブテリモンの頭部ごと口を覆つたウイツチモンはそのままコカブテリモンごと小屋の外のテーブルの方へと運んでいった。

「……?」

ウイツチモンはよくわからない行動をとる。やはりデジタルワールドに来て数年経つとはいまだこつちの文化になじみ切つていないのかもしれない。それとも逆に私がこの森に籠つてるせいだろうか。

そういうえばと思い出す。何時から私はこうなつたのかと。過去の私はもつといろいろ彈けたクロスの名に相応しいデジモンだった。迷いの森はこの世界の玄関、異世界からのデジモンや物が月一ぐらいで迷い込んでくる。今と同じように私はこの森にはいたわけだけどその役目は保護と自立の支援、機関の手続きじゃなくて……

小屋の中に設置された黒電話がなる。商人が来るのはもう少し後だしこの森のどこかに迷い込んだものがあつたのだろうか？それともまたウイツチモンのスカウトか。

高等フロクテム言語のある程度なら学へは使えるその素晴らしさが云々とか言つてウイツチモンを誘うデジモンはそれなりに多い。どこから情報が漏れたのかと言えばデュナスモンがチラツと話してしまつたらしい。どうやら私のことをふ抜けたとか牙の抜かれただとか表現されて如何にすごいか、どんなデジモン達に慕われているかと言う話をして、その中で振れてしまつたのが広まつたと。

私のせいでもあるわけだからデュナスモンと二人で謝つたのだが
そしたらじやあお詫びということでこの森に住んでいいですよね
？また守つてもらいますからとだけ言つて許してくれた。

どうやらウイツチモンはここに永住するつもりなのでこういう話はそもそも聞かない方がいいような・・・でも仕事かもしけない。ということでたつぷりと迷った後で出た。

『遅いぞクロスモン。』

「あー、ケテウイくん? どうしたの? 仕事?」

電話の相手は「クレヴィくん」と「クレヴィアエンシエモン」六枚の羽を持つ金色の鍵を持つた天使型のデジモンで異世界へと通じるゲート、ゼニスゲートを管理している。デジタルワールド内でもだいたいの場所にゲートと言う空間の穴を開けて瞬間じやない瞬間移動をすることができるデジモン。私が保護したデジモン達や物を元の世界に送る時にいつもお世話になつていてる。

『それどころじゃないんだ。近くの村で孤児院経営してるエンジエモンから連絡があつて迷いの森にブレイクドラモンが向かってるらしい。このままだと森が無茶苦茶になるかもしれない、俺もゲートの使用申請が通つたらすぐ駆けつけるからそれまでにスクラップにしなくてもいいから機能停止に追い込んでくれ。』

「わかつた。ちようど一はん時だつたんだけど……終わらせたらクラ

「ヴィくんも食べていく?」

『いただく。ウイツチモンのステップがあつたら尚良し。』

「タイミングよくいるよ。』

『おしつ! ジやあ早く終わらせないとな!』

——ブツツ

クラヴィくんが回線を切ったのを確認して僕はウイツチモンの方に向き直る。

「ウイツチモン。ちよつとお仕事入つちやつたから先食べてて、五分で戻つてくるから。』

「・・・まあいいです。五分と言いつつ三十分ぐらいかかるんでしょうけどそれまで何とかやつておきます。』

ウイツチモンは世話を押し付けられて不機嫌そうだつたがそれでも引き受けてくれた。

「行つて来ます。』

ひらつと手を振る。

「精々頑張つて行つてらっしゃい。先に全部食べておきます。』

ほんの少しだけ笑つたウイツチモンに見送られて私は生体金属クロンデジゾイトで覆われた翼を羽ばたかせて一気に上空に上がつた。バクモン達からも行つてらっしゃいという声がかかつたのを聞いてさらに高く、森全体が見渡せるほどの高度にまで上がる。するとそれは簡単に見つかつた。森の淵の方、迷彩柄に深緑色と目立たない配色なのにあまりにも大きくて意味を成してなかつた。

幸先いいかもしねないと思いつつ僕は急降下しながらまつすぐブレイクドラマに向かつて行つた。

ブレイクドラマの姿はとても生物とは言い難く、パツと見て目以外に生身の残るところが見当たらない。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオ

口の中も生身だつたみたいだけどそれよりもどうやらこの咆哮が僕を見つけたからものであることが大切だ。まつすぐ向かつてゐるのだから見つからないわけがないのだけれど意思がなさそうな割に

は早く見つかった。センサーも内蔵されているのかもしれない。

久しぶりの戦闘だ。あまり楽しい行為じやないから乗り気じやないけど仕方がない。

正面からツツコめば自然その攻撃は迎撃に向かう。ブレイクドラモンの腕に当たるだろうアームが私に向かつて真つすぐ伸ばされる。それを受け止めて体全体で押し込む。頭部の操縦席らしい部分をどうにかすれば何とかなりそうな気がするから無駄なことはしない。私にはあまり際立つた攻撃は無いから単純に頑張る。

力ではどうやら加速していた分私に分があるようだけどやつぱりそう簡単には決めさせてくれなくて尾の先に付いたドリルで横から私を攻撃してきた。せつかくなので力を抜いてアームを引いてドリルが当たるようにするとガリガリと言う音と共に簡単にアームの先がバラバラになる。

アームを失つてこつち側に攻撃しにくくなつたからかもう一本の尾のドリルに背中の三本のドリルもにゅうと触手の様に伸びて私を襲う。これはプログラミングされている動きなのかドリル同士がぶつかること無く私を追い詰めていく。これは少しまずいかもしれない、当たり所が悪かつたら死ぬかもしれない。五分で戻れるか怪しくなってきた。

「ふつ。」

覚悟を決めて空中で加速して一気に頭部を狙う。喰らつても頭さえ潰せれば森は守れる。ブレイクドラモンが死んで光の粒子にならなくとも機能停止させればクラヴィくんが回収してくれる。

迫りくるドリル。一瞬バラバラに碎けたブレイクドラモンのアームが脳裏をよぎるが怖さを吹つ切るために逆に加速する。一本、二本、三本、四本、あと一本避けければ届くというところで避けきれない位置にドリルがやってきた。

「ていつ。」

クロンデジゾイトで覆われた腕はドリルが当たつても砕けなかつた。反対の腕でドリルを下から弾いて上げ進路を確保する。やつぱり壊れないだろうとは思つてたけども実際試すとなると少し怖い

ものがあつた、昔みたいにはいかない。

ブレイクドラモンの頭の上に着地してみると何かレバーのようなものが生えていたがどれをどう動かせばいいのかわからない。停止スイッチぐらいあつてくれればよかつたのに全く見当たらぬ。

頭の上でのんびり考えていると後ろからドリルの回転する音が聞こえてきた。まさかこの状況で私を攻撃するつもりか？

私が急いで飛びあがるとそのほんの数秒後にはブレイクドラモンの頭に五本のドリルが刺さつて頭を前衛的なオブジェへと変化させる。

「うわ・・・」

そう声が出た後にはブレイクドラモンは事切れて死んだ証の光の粒子になつて天へと昇つて行つた。

「・・・お前、早すぎだろ。せつかく許可取つたのに遊びに来ただけじゃん俺。」

上を見上げるとクラヴィくんがあきれた様子で私のことを見下ろしていた。

「じゃあその分ゆつくり食事しようよ。今ならまだ冷めて無い筈だよ。」

「お前処刑人が復活したと思えばそんなに食事好きなのか？それともウイッチモンが好きなのか？」

私と同じ高さにまで下がつて来ながらクラヴィくんがやつぱり呆れたような調子で言う。

「もう私は処刑人じやないつて言つてるのに・・・で、なんでウイッチモン？」

今もそう言う風に呼ばれてるけれどそう呼ばれてたのは十年も前のことだ。

「・・・いや、いいや。早く行こうぜ。」

クラヴィくんが虚空に鍵を差し込んでゲートを繋げる。私達はそれを通つて私の小屋の上空へと出ると花にデジタケと魚介だしのいい香りが鼻をくすぐつた。匂いだけで美味しいということがわかる。

ただ、それ以上に少し嫌な気配があるのを感じた。

「おやおや、処刑人様のお出ましですか・・・」

ウイツチモンと色合いが少し似た悪魔が私の姿を確認して昔のあだ名を言つた。

そしてその腕の中にはウイツチモンがいて黒い石像になつたバクモンが転がつていて他の五人は黒い石像の近くで怯えていた。

「・・・クラヴィくん、お願ひしていいよね。」

「りよーかーい・・・」

クラヴィくんが少し離れたところの地面に着地して空に向かつて鍵を突きだして捻る。空にゲートが開き同時にバクモン達の下にもゲートが開いてクラヴィくんのところに全員集まる。

「ゼニスゲートの鍵までいるとはとても敵いそうにはありませんね・・・まったく世の中思うようにはいかないものです。この前は暴食の魔王様に強制退化させられ、今度は虎の子のブレイクドラモンまで出したというのに計画はぐだぐだ、正直辛いです。」

フエレスモンは芝居がかつた口調でそう言つた。

「とりあえずウイツチモンを置いていつてよ、私は怒るのはあまり得意じゃないんだ。今なら見逃すから。」

私は今どんな表情をしているだろう。ウイツチモンはフエレスモンにも怯えているけどそれ以上に私に怯えているように見える、きっとそれはそれは恐ろしい顔をしているに違いない。十年前まで表に出る程に抱いていた黒い気持ちがまたくどくと溢れ出ている。十年前よりも強く思つてているといつても過言じゃない。

「・・・そうはいかないのですよ。蠅の魔王に仕返しする気でいましてね、高等プログラム言語はそのために必要なんです。高等プログラム言語さえ教えてくれればすぐに返しますよ、美しい石像にして。」

ウイツチモンの顔がより一層の恐怖に歪む。最初に会つた時と同じ表情だ。

あの時、ウイツチモンが来た時にこの世界に来たのはウイツチモンだけじゃなかつた。なんとも形容しがたい化け物も一緒に現れた。それまで生れた島を滅ぼした異世界のデジモンを憎んで異世界から来るデジモン達を無差別に排除する仕事をしていた私の視界の中

でウイツチモンは島にいた無力なデジモン達と重なった。

もうすでに大分弱つた化け物だつたけれど元はロイヤルナイツクラスだつたんじやないかと思う程の強さでウイツチモンを庇いながら戦つた結果私は死にかけた。ウイツチモンが拙い治療を施してくれなかつたら死んでいた。そして処刑人だつた私は死んだ。

異世界からのデジモンと言うだけで嫌悪感を抱く理由にはならないと知つて、それまでただ殺すだけだつたデジモン達を保護した。デュナスモンに連絡を取つてクラヴィくんを紹介してもらつて送り返した。適当に追い出していた普通に迷つたデジモン達に居場所を作つた。

次第に故郷にいた時のように表情にはでなくともとりあえず笑えるようになつた。

「それで許すとでも思う？本当に私を怒らせないでよ……」

生体金属クロンデジゾイト、生体とあるだけありそれは生きた金属、宿主と同調しその堅さを増したりもする。よつて宿主の状態と言うのは大きく影響する。

——ギギギ……

翼を広げると金属の羽の一枚一枚が丸みを無くしより鋭利に凶器となり得る形へと変わつていく。それはつまり私がフェレスモンを殺したいという気持ちを多分に持つてゐるということになる。

「いいんですか？あなたが大切にしているウイツチモンの命は私の手の中にあるのですよ？この美しい肌、傷つけたくはありません。」

フェレスモンが左手の爪でウイツチモンの頬をつーっと撫でる。

そういえばいくら格上とはいえウイツチモンは簡単に捕まるだろうか？ どうか、バクモンを石像にして人質にしたのか、壊されたくなければとかそういうことを言つて。

「……怒るのは得意じゃないって言つてるのに、手加減できなくなるんだよ……」

ウイツチモンが小さく口をパクパクと動かす。助けてなのか制止の言葉なのはわからぬ、ただその瞳から一筋涙が流れたのが目に入つて、私の中で何かがちぎれた。

「お前がウイツチモンを殺したら私はお前を殺す。十字の名にふさわしく磔刑のように両手両足の動きを封じて散々に苦しめ散々に辱めて殺す。羽と四肢を挽いであえて最低限の止血だけして次第に失血死していく様を嘲笑いながら殺す。」

そこからはもう何を言つたかも覚えていない。クラヴィくんが話し始めてすぐにバクモン達をどこかに追いやつて自分自身もいなくなつたことだけは辛うじてわかつた。

怯えの色が見えたフェレスモンの腕の中でウイツチモンがぼろぼろと涙を流しているのを見て私は我に返り今にも飛び立たんとしていた。まだ怒りは収まらないし殺したい気持ちはとめどなく湧いてくるものの視界はクリアになつた。

「・・・消えろ。今すぐ消えろ!!」

私が叫ぶとフェレスモンはこれが最後のチャンスなのだと悟つてウイツチモンを投げ捨てるようにして離れてから逃げた。ウイツチモンを投げ捨てたという事実にまた何かがおかしくなる。

「ミステイック・・・」

口の中に白い光線が集まる。あらゆるものを灰塵に化す攻撃の乏しいクロスマンの一攻撃に特化した必殺の一撃、それを私はフェレスモンに放とうとして、ウイツチモンが止めてと言つたような気がしてその方向を変えた。

「・・・ブレイク!!」

それはフェレスモンの右の羽を灰にするだけに留まつてそれで終わつた。フェレスモンは墜落したけれど死にはしないだろう。

私はスーツと胸の内に黒いものが戻つていくのを感じてほつと溜息をついた。とりあえずは大丈夫だ。一度こつち側に戻つてきてしまえばもう一度来ても最初からすぐに追い出せる。

「・・・大丈夫? ウイツチモン。」

立ち上がりつて服に付いた土埃を風の魔法で落とすウイツチモンに近寄りながらそう声をかけるとウイツチモンはかなり不機嫌な無表情だった。

「私は大丈夫です。特に害も与えられてませんし誘われ方は無粋でし

たがデートのお誘いみたいなものです。」

ウイツチモンはそう言つたけれどもやつぱりかなり不機嫌そうで世代を超えて少し萎縮してしまった程の迫力があった。

「強いて怖いものがあつたとすればクロスモンです。クロスモンはいつもみたいに女々しいぐらいでちよどいいんです、最初会った時にたいにただの獣みたいなクロスモンは嫌いです。今の女々しいクロスモンの方が・・・その、あれです。どつちかと言えばですけど・・・好きです。」

何故か途中から語気が弱くなつて顔も赤くなつて箒を持つてもじもじとした感じでウイツチモンは言つた。やつぱり普段言わないようなことを言おうとすると照れるんだろうか。

「そうだね、私も今の私の方が好きだよ。ありがとう。」

やつぱりその外殻は神經通つてないんですね。と言つてウイツチモンは盛大にため息を吐いた。確かにクロンデジゾイトと直接つながつているわけではにけど生体金属のクロンデジゾイトは私に感覚をちゃんと伝えてくれる。そういうことを説明するとウイツチモンはクロンデジゾイトじゃなくてクロスモン自身に通つてないんですねと言つて箒で私を小突いた。痛くは無いけどこそばゆい。

「ところでバクモン・・・大丈夫でしょうか。」

私を小突きつつ顔を曇らせながらウイツチモンが言う。黒い石像にされたバクモンはクラヴィくんが連れて行つたままだ。

「大丈夫、クラヴィくん達天使型のコミュニティーになら回復方法もあるはずだよ、連絡待ちだね。」

「・・・」

ただやつぱりウイツチモンの表情は晴れない。本当は少し怖かつたのかもしれない。怯えていなくなつてくれたくらいいけど先にウイツチモンを石にして運ぶとかされていたら間に合わなかつたかもしれないその後のことは想像したくもないだろう。私だつて想像したくない。

「・・・ウイツチモン、またここに住む気、ない？」

とりあえず話題を変えようと思つて一番最初に出てきたのはそん

な言葉だつた。でも考えてみれば悪くないかもしれない。

「え？なんですか……急に。女々しい方がまだましとは言いましたけど、自立もできないのはどうかと思いますよ？」

「いや、そうじやなくてさ。ウイツチモンに傍にいて欲しいなって思つて……」

そう言うとウイツチモンの無表情が崩れて顔は今までにないぐらに真っ赤に、視線がきょろきょろと動いて嬉しそうな驚いたような感じでそわそわしました。

「……その、それはあの、あれですか？その、えっと……あの……」
箒を風の魔法でぶんぶん振りながらもじもじするウイツチモンはなんだか普段のウイツチモンとは思えなかつた。

「また、こういうことがあつた時に傍にいれないのは嫌だから。今日も同じ家にはいたわけだけど、別々に暮らすよりは守りやすいかなつて……」

「……ですよね。クロスモンは目もありませんし神経通つて無いんですね？そもそもデジコアちゃんと稼働してるんですか？思考プログラムのところに欠陥もあるんじや……」

それと今日気づいたことがある。私の中でウイツチモンが捕まつているのを見た時、私は故郷を潰された時よりも怒りが溢れていた。まだ殺された訳でもなかつたのに自制すらできないほどに。つまりこれが示すのは……

「後、もしかしたら私はウイツチモンのことが好きなんじやないかなつて思つて。」

それだけウイツチモンのことが大切だつてことで。相手を殺すのも厭わないぐらいまでになつてるならそれはもう友情とかじやないんじやないかなと思つて。そしたら恋愛感情かもしれないという結論になつた。

「……」

ウイツチモンは何を言おうとしてたのかわからないけど口をパクパクさせて箒をグルングルン回転させて顔を再度真っ赤に染め上げてた。

「えっと、ウイッチモンは私なんか嫌いだらうから、デュナスモンとかクラヴィくんの方にいてもらう方向でもいいんだけど……」

慌てて言うとウイッチモンは我に返ったように箸の動きを止めて帽子を目深に被つて顔を隠した。

「……やっぱりクロスモンは神經通つてないみたいですね。というか気が付いて提案したわけじゃないんですね？私は、ずっとその、アピールしてたじやないですか。その、えっと、好きだつて……」

「その、それはオッケーって、こと？」

「それ以外にあるわけないじゃないですか……遅いです、遅すぎます。クロスモンはもう少し私のこと見てくれるべきです、もつと見てください。私ばっかり見ると少し寂しかったりもするんです……」

「う、うん。」

帽子で顔を隠したまま私に飛びついてきたウイッチモンはなんだかとても可愛くて、私は抱きしめるべきかどうか迷つて抱きしめようと手を伸ばした。

「おーい！バクモンが治つたぞー！！」

その時に後ろからクラヴィくんの声がしてウイッチモンは私を突き飛ばすようにして距離を取つて、私も驚いた上に押されたせいで転んで地面に仰向けになつた。

「クラヴィスエンジェモンのにーちゃん、人の恋路を邪魔する奴にはスレイプモンがビフロストつて謡があるんだぞ。」

見上げるような形になつた私に覆いかぶさるようなクラヴィくんの足元にいたコカブテリモンが脛に肘を入れた。

「知らん。俺スレイプモンと知り合いだし、あの人博愛主義者だし！」

「クラヴィー、最低だねー。」

バクモンはクラヴィくんの頭によじ登つてガンガン殴りつけてる。コカブテリモンと違つて遠慮が無い、全力だ。私がなまじ堅いから力加減が分からなくなつてる。でもクラヴィくんはそこまで堅くない、ブレイクドラモンよりも柔らかい。

「痛つ痛つ……黙れガキ共。俺はデューエク先輩みたいに親友が結婚秒読みみたいなことをぐちるためにわざわ三大天使様経由で俺を呼び

出すような感じにはなりたくないんだよ！」

「大人気ねえ通り越して情けねえ。ギザモン、乗れ。」

「おーっ！」

シャーマモンが棍棒でクラヴィくんの足を払つて、そこにダメ押しとばかりにギザモンがぶつかる。

「お、おおっ!?」

そして後ろによろけたクラヴィくんが視界から一気に消える。何事かと思つて立ち上がり見てみると爪をちよつと土で汚したガジモンといつの間にか深く深く、クラヴィくんがすっぽりハマるぐらいに掘られた穴と腰で折れてザリガニみたいな形になつたクラヴィくん。と、おまけにギザモン。

「えと・・・その、や、やつぱりよくないと思うんです。」

もじもじと言ふガジモン。一週間で二百七十三回落とし穴掘つただけのことはある。ギザモンも結局はまつてるけど。

「くつ・・・羨ましいんだよコノヤロー！ 幸せおすそ分けしろー!!」

クラヴィくんが何とか出ようともがく。しかしひニスゲートが関係してない時のクラヴィくんはかなり非力だ、具体的に言うと私の三分の一ぐらい。ブレイクドラモンにあつさり押し切られるぐらいだ。

「・・・ならおすそ分けしてあげましょう。」

いつの間にか復活したウイツチモンが私を押しのけて箒の柄を落とし穴の方へと向かう。

「アクエリープレッシャーー！」

全力で放たれた水の魔法がクラヴィくんの仮面を正確に狙つて注がれる。全身クロンデジゾイトで覆われた私でもちよつと恐ろしい光景である。仮面は歪んでいるし溺れそうだしでとても可哀想だ。ギザモンは喜んでるけれど。

「今幸せですか？ そうですか幸せですか！ じゃあもつとどうぞ！ 遠慮はしなくていいですよ、いくらでも出せますから！」

「ウイツチモン、落ち着いて！」

流石にクラヴィくんが可哀想だつたのでウイツチモンを羽交い絞めにして引き離す。最初は邪魔しないでくださいと言つていた

「クロスモンだつたけど次第にもじもじしだして大人しくなつた。

「クロスモンだいたーん。」

「後ろから抱き着くなんて普通できないよなー。にーちゃんすげー。」

「あ、ごめん・・・」

バクモン達にからかわれて慌ててウイツチモンを下ろすとウイツチモンは上機嫌で早く食事にしましようと私の手を取り、五人を風の魔法で持ち上げてテーブルにつかせた。やっぱり魔法って便利だ。

「さてと、少し冷めちゃつたかもしれないけど・・・」

もうすでに六人分並んでたご飯やスープを見ながら自分の分もよう。クラヴィくんの分は用意しようか迷つたけど食器だけ出しておくことにした。

「私が温めます。火の魔法は苦手ですけど・・・」

ウイツチモンが集中した様子で箸を振るうとご飯やスープから湯気が立つて美味しそうな匂いが強くなる。

「じゃあ、食べようか。」

「あ、あの・・・ウイツチモンさん、クロスモンの隣、座らなくていいの？」

ガジモンが席を立つてウイツチモンの服の裾を引っ張る。ウイツチモンがその手を洗つてやりながら私の方を見たので私は少し恥ずかしいなと思いながら頷く。

ウイツチモンは私の隣に座つてガジモンはウイツチモンの席だつた席に座る。ガジモンもみんな嬉しそうにニコニコ笑つていた。

「じゃあ、今度こそ・・・」

「「「「「「いただきます。」」」」」

七人で言つて一齊にご飯やスープや炒め物に手を付ける。何から食べるかは少し性格が垣間見えて楽しい。

「あ、そういうえば今度ウイツチモンに手伝つて欲しいことがあるんだけど来てくれる?」

「何言つてるんですかクロスモン。今日から私ここに住むんですから来るも何もないじゃないですか、やっぱリデジコアが働いてないんじゃないですか?で、何をするんですか?」

私は魚醤とについて簡単に説明し、濾す必要があるということを説明した。ウイツチモンなら魔法で簡単に濾せるんじゃないかと思ったのだ。

「それだつたら濾すまでも無いです。液体だけ部分だけ操つて取り出せば大丈夫・・・今日の炊き込みご飯、しつかり味してますね。」

ウイツチモンが炊き込みご飯を食べて少し微笑む。

「ミドリデジタケの内何個かは先に出汁取つて、勿体ないから炒め物に・・・このたまごスープもやさしい味だね。ほつとする。」

私とウイツチモンは顔を見合わせて少し笑う。それを見てコカブテリモンとシャーマモンがニヤニヤ笑つてガジモンとバクモンが嬉しそうにしてギザモンはそもそもこつちを見ずに炒め物に夢中だった。

「ちくしょうこの馬鹿夫婦め！」

なんとか這い上がつてきたクラヴィくんが律儀に体を泉で洗つてから空いている席にどかつと座つて自分の分の炊き込みご飯と炒め物、スープを取つて食べ始めた。

「・・・そこそこ美味しいのが余計に腹立つ。」

「そこそこと言うなら食べなくとも大丈夫です。ギザモンにでも上げてください。」

「まあまあ、みんなで食べた方が美味しいから。」

「くそつ・・・嫌なやつだつたらよかつたのに・・・」

クラヴィくんも入れて八人で囲む食卓はいつもよりも騒がしく、いつもよりも楽しく、いつもよりも幸せだった。

暗黒騎士の夕食の物語。

なんだかマンネリになってきたな、そう思う俺の視線の先には俺の家がある。

ところどころにゴミが落ちてる荒野の中心部、円形にゴミが落ちていないエリアにある俺の家はもはや城と言った方がいいかもしない規模だがあくまで俺にとつてはただの家だ。ヒマだから拾つたゴミを使つてごく漬しの相棒と面白おかしくやってみたらなんだか一つのアートみたいな感じになつてしまつただけだ。ちまたでは化け物が住んでいるとか言われているが俺みたいな操り人形ぐらいしか住んでないのに何を言つてるんだかわからない。

「帰つたぞ」「く漬し！」

俺が呼ぶとてつぺん近くの赤い縁取りの丸窓から紫銀の暗黒騎士が転がり落ちるように降りてきた、というか転がり落ちた。せめて悲鳴の一つでも上げればいいのに必死に声を出さないように押さえている感じが何とも痛々しくて残念に思える。あれでロイヤルナイツの一体の名前が種族名に入つているんだから世の中は不思議だ。

「お、おかえり・・・ピノッキモン」

「わざわざ出迎えにくんなつて言つてんだろうが、まつたくどんくせえ」
どんくさいくせに俺が投げつけたビニール袋は簡単にキヤツチする。俺もそうだがこの馬鹿野郎もやつぱり腐つても究極体といふことなんだろう、俺は持つてくるだけで重労働だつたのに軽々と持ち上げて立ち上がるし、まあいくら力があつても相棒は基本的にただのごく漬しなんだけど気に入らない。

七色に塗つた歪んだ鉄骨の階段を上がつて中身をくりぬいてすかすかにした元々は重厚な木の扉を開けて中に入る。我が家ながら何とも混沌とした内装だ、俺が適当に組み合わせたり貼り付けたり打ち込んだりしたからつて言うのもあるが相棒の色彩感覚がお伽噺みたいな鮮やかな色だらけなせいがほとんどだ。

「でも・・・私、本当何の役にも立たないし・・・せめて、何かやれたらなあつて・・・」

でかい騎士がうじうじしているところを見せてどうしたいのか。というかしやがんでも俺よりもでかいのが本当ムカついてくる。「何かしたってんならとりあえず縮め、だから家がこんなでかくなんだよ」

「ふ、ごめんなさい・・・」

骨組みを作ったのは八割方俺だから八つ当たりなわけだけど反論しようとしたいこいつも悪い。もう少し自己主張しても俺はいいと思う。それだけの力がある、だがこいつは自信も勇氣も怒りも持たないかのような聖人君子ぶりだ。カオスデユーラクモンといえばその名前だけで畏敬の念を抱かせるほどの種族だ、だけどこいつは団体の小さな俺よりもよっぽど小心者で他人と関わりたがらない。

「あーもう、そうすぐへこむな。ほら、ペンキ買つてきたんだから塗つてないところ塗るぞ」

このゴミ以外何もない荒野は逆に言えばゴミだけはある。でもペンキとか色を塗れるような都合がいいものはほとんどないしあつても腐つてたり乾いてたり使えないから別に用意するしかない、あくまで日用品とかを買いに行くついでだけど。こいつはこれぐらいしかやることが無いんだからペンキ分ぐらいは余分に稼いでやつて買ってきてやるぐらいはしてやらんことも無い。

「わあ、いっぱいある・・・これだけ買つたら高かつたよね」

鎧で覆われているのにぱあっと顔が明るくなつて高かつたよねで一気に逆に傾いた。

「申し訳なさそうな顔すんな、素直に喜んどきやいいんだよ、まつたく」

買った日用品の三倍ぐらいしか金はかけてない、ちよつとクズ鉄組み合わせて作つた人形売つてくれれば百体ぐらいですぐに稼げる。精々半月もあれば十分、暇を持て余してゐる俺にとつちやなんの苦でもない。

「で、でも・・・ピノツキモン時々寝ないでずつと人形作つてるし、無理してくれたのかと思つたら・・・」

「全然無理なんかしてねえよ、まつたく俺が好きで作つてる人形なん

だから楽しいに決まつてゐるだろうが」

俺の身体は基本的に木で作られているわけだし時々油を注してから徹夜ぐらいじやそこまで疲れない。まあよつとは疲れるがせいぜいフルマラソンを完走するぐらいの疲労度だからさして支障はない、本当心配されることなんて無い。

「好きなら、その、何で売るの？」

「・・・そりやあれだよ、作るまでが楽しいんだ。まつたく・・・芸術はグランデスピツグバンつて言葉もあるだろ、発想が出て作るまでがグランデスピツグバンなんだよ」

正直くず鉄を集めて接着したりするときに少しミスつたりするとイライラするけど?全然何作ればいいのかわからなくて頭抱えて悩んだりとかするけど?そんなことは些細なことだ、コキユートスブレスぐらいいしかストレスを感じることはない。

「だいたいこういう時に言う言葉はちげえだろ、まつたく」

別にお礼の言葉が聞きたいわけじゃない、喜んでもらえればいいというかなんというかそもそも俺はあくまで買い出しのオマケで買ってきたわけだし気まぐれというか金が余ったから買って来てやつただけというか、お礼を言われればそりや嬉しいかもしれないけど聞きたいというわけじゃない。

「ピノッキモン。あ、りがとう・・・」

相棒は少し照れたような感じで言う。やつぱりカオスデューケモンらしくない感じだ、まあ嫌いな訳ではないがそういう感じのは幼年期とかがするやつだろ普通。

「・・・どういたしまして、まつたくでかい奴がそういう感じで言うと気持ち悪くて仕方がねえな」

とつとと塗り始めろよと言つて背中を押してやるとまた嬉しそうな感じではけを取りに小走りで行つた。俺の全力疾走と並ぶぐらい早いけどあいつにとつては小走りだ、マントで飛んだりもするし本当に無駄にハイスペックでムカついてくる。俺じゃなくてあいつが買い出しすればずつと早く終わるだろうに他と関わりたくないつて言うんだから仕方がないけど。

「じゃあ俺、人形作ってるからな！」

そう叫んで置いて自分の部屋に入る。他の部屋は極彩色だが俺の部屋は静かな灰色だ、さすがに寝る場所は落ち着きが欲しいということで白色に塗つたのだが鉄粉やら楠美やらで気が付いたら全体がグレーになつてた。まあこつちのほうが落ち着くからいいのだが微妙な金属光沢があるせいとことなく相棒の鎧つぽい感じがある。夜になると空の青暗さが映つてよりそれらしく見える。まあ今は昼だからそうでもないが。

さて、どんな人形を作ろうか。今日買い出しに行つたついでに人形を売つたらサンゾーモンとかいうデジモンが子供向けのを五十体程度大量に発注してくれた。学校を経営しているとかで安く玩具を提供して欲しかつたんだそうで値段がもう少し高くてもこの頑丈さなら十分に安いとか言つていた。

とりあえず幼年期向けとして考えて、やつぱりロイヤルナイツとか七大魔王とかの奴とかそういうのがいいだろう、学校なわけだし創作よりも多分勉強になつてくれる。

姿形がわかる有名なデジモンときとうに模倣して作つていこう。材料はいくらでもあるし、道具だつて今日買い足した。足りないのは具体的なイメージぐらいだ、ものすごい致命的だけど。そもそもロイヤルナイツとか七大魔王とかオリンポス十二神族とか四大竜とか四聖獣とか身近にいるようなデジモンじゃないんだから資料でもないと作れない。

まとまつた金はまああるし売れそうなゴミだつてあるから売つて金でも作ればプロマイドぐらいは手に入るだろうけどそれはつまり今日はもう何もできないということだ。

適当に何か作るかとも思つたが全部元がゴミだから二つ同じものを作るのは難しい。ほとんど不可能だとすら言つていいかもしけない、初めて発注された仕事なわけだし妥協しないで頑張つて定期的に納品できるようにしておきたい、そうできなくとも不足が出たらピノツキモンにとなれば他にも買い手がいっぱいいくつくなるだろう。多分。

仕方ないから色塗つてる様子でも眺めて一日過ごしてよう、飽きたら一眠りして起きたら寝てる間ににあいつが作ってくれた飯食つて油さしたり汚れ拭き取つたりして、明日に備えて相棒の色になつた部屋でゆつくりご寝よう。

で、ふと思い出す。そういえば相棒はカオスデューケモンだ、その姿はロイヤルナイトの一体であるデューケモンと色味が違うだけな筈だ。じやあ相棒をモチーフに作れば注文に相応しいそれができる。

そういうんで俺は今まであいつのことを作ろうと思わなかつたんだろうか、街で見かけたデジモン達は許可を得ることも無く手当たり次第に作つて来たのになんでか作つてない。

扉へ向かつていた足をUターンして作業台の前に座る。あいつの姿は毎日毎日飽きるほど見てる、実際に飽きたことは何故か無い訳だが、とにかく瞼の裏にすぐ浮かぶほどだから特に資料なんかいらない。

ナットとか螺子とか鉄板とかすでに丸く加工されていて薄く加工されてたりそういう金属系のやつでそれぞののパーツのパーツを作つて、木を削つた部品とかでそれをつなぎ合わせる。螺子は使うけど接着剤とかは使わない、すぐ外れるし金属も付けられるようない接着剤はけつこう値段が張るから元が取れない。

部品が見づらいなと思つたら日が落ちかけていた。デューケモンはそれなりのでき、後はデュークモンのトレードマークの真紅のマントを付ければだいたい完成、色は付いて無いけど今まで付けてないしまあいいだろう。

「ピ、ピノッキモン？ その、ご飯できたよ？」

ちようどいいタイミングで相棒が呼ぶ声が聞こえる。こいつの飯を作るタイミングは何故か俺の腹が減るタイミングにぴつたり合う、時々夜食も作られてたりするしこいつには俺の未来が見えているのかと思うぐらいだ。少し気持ち悪いがああ長いこと一緒にいるしそんなもんなんだろう。

「おー、ちようどひと段落ついたし行くわ」

どれだけ疲れても変わらず軽い体を持ち上げ食卓まで行こうと歩

いていつて部屋の扉に手をかけて、ふと机の上の二体の人形も持つていくことにした。金属とか木のごみは俺のところに置いておくが布とかはあいつのところに置いてあるからそれっぽいのを探してもらう必要がある。

「きよ、今日は食用サボテンステーキと、に、肉の脂身の辺りを、こうね？ カツリカリに焼いて・・・あとデジタケも一緒にしたスペゲッティ」

自信作だと嬉しそうに笑っている。匂いだけで美味しいんだろうなということがわかつてくるぐらいで俺はすぐに食卓に乗つてサボテンを切つて口にいた。少し粘りがあるサボテンの味 자체は薄いがかけてあるソースがサボテンの微かな甘みを殺さないように旨みを追加してくれる。

「いつもながらお前は飯作るのだけはうまいな」

新しく塗られた箇所も極彩色で訳が分からない、とりあえず明るい色ならいいだろうと縫つてるんじやないかと思うぐらいだ。

「そ、れは、ピノッキモンにお世話に、なつてるから・・・なにかできたら、いいなつて・・・」

スペゲッティを行儀悪くする。カリカリのベーコンの食感がアクセントになつて食が進みそうな感じがある。

実は俺には美味いというのがわからぬ、元はわかつていたのだがどこかのタイミングで味覚とそこを繋げる回路が壊れたらしく旨みだつて感じるのに美味しいというのだけわからぬ。今ではだいたい味覚の構成でどんなものが美味しいのかはわかるがそれでも本当にわかつているというわけではないと思う。

でも不思議とこいつの作る飯は美味しい、なんとかはわからないが味覚と関係なく美味しいとデジコアが認識してる。

「じゃあこれに使うから赤と紫の布があつたら持つてこい、こつちの方は色塗りもやつてくれ」

「えと、これつて・・・私？」

二体のデュークモンの人形、一方は俺史上最高のできでもう一つはそれなりのでき。

「ああ、こつちだけな。もう一つは発注された人形だから赤色の布で
デュークモンにする・・・ニヤニヤ笑うな気持ち悪い」

「うん、でも・・・ピノッキモンが私を作ってくれるなんて初めてだか
ら、嬉しくて、その、ありがとう」

わざわざ言わなくていいんだよ馬鹿、そう咄嗟に口に出してしまつ
たがなんとなくこつちも嬉しい気分になってきた。今日の飯は一段
と美味しいかもしない。

酒神のジュースの物語

帳簿に書かれた数字の羅列は減少の一途を辿り、このままだと後半年もすれば赤字収支になつてしまふだらうことは想像に難くない。理想だけで学校が経営できないという現実を思い知らされた。

シャカモンが死の間際に書いたという経典の束、それを三体の弟子たちと共に追い求め、その教えを学び、純真な子供達から伝えることでより広く教えが伝わっていくのではないかと設立したこの学校だが運営費用が足りない。援助されている資金は少なくはない、特にオリンポス十二神族からのそれは多い、ウエヌスモンが学校の方針に賛同してくれ他の神族にも口利きしてくれたとかでケレスモンとバッカスモンからの寄付金が特に多い。だがそれでも足りないほどに規模が大きくなつてしまつてているのだ、もちろん規模が大きくなるのはそれだけ教えが行きわたつてているということだからいいのだけれど資金不足で誰にも教えられなくなつたら意味が無い。

寮も運営していかなければいけないし幼年期成長期の子達に食べ物のことで我慢させるわけにはいかない、経費を削減できるところが無い。おもちゃの類を丈夫なものに変えて少しでも消費を減らそうとしたり、成熟期の子達にアルバイトを紹介してその際に仲介料をもらつたり成長期の子達で作つたクツキーを販売したり食堂を一般にも開放したり少しでもお金を入れられるようにしてはいるのだがそれも足りない。

今日の午後には編入させたい幼年期の子がいると話し合いをすることになつた。なんでも七大魔王が関わつて いる そ う で そ の 個 体 自 体 に 問 題 は な い け れ ど 現 保 護 者 が 説 明 し て お き た い の だ と い う。 だ つ た ら 自 分 で ど う に か し て く れ と 思 う の だ が 、 そ の 保 護 者 は ロ イ ャ ル ナ イ ツ に 雇 わ れ た と 言 つ て い る と か 、 次 々 と 衝 撃 情 報 が コ ン ビ ネ ー シ ョ ン の よ う に 叩 き 込 ま れ て く る。

で、午前は遠足の付き添いだ。幼年期の子達のペースだと半日で一往復だが完全体の私ならもつと短い時間で行き来できる。それこそ二、三時間とかで往復できる。だなら十一時ぐらい、幼年期の子達昼

食を食べだすぐらいに遠足を抜け出して命に感謝しつつ走りながら食事を取り、学校に戻つて息を整え、来客を待つ。

「初めまして、ピチモンの現保護者に雇われているマーメイモンです」
来たのは何かを悟つたような目をした人魚と、その隣にちよこんと座つた水色のことなく水玉を思い浮かばせる幼年期。どちらも水棲系だろうが普通に生活できてるらしい。

「私、この学校の校長をしています、サンゾーモンです。先に聞いた職員の話だとなんでも七大魔王が関係しているとか」

「そうですね、このピチモンはベルゼブモンが命を救いデューコモンに預けた個体です」

胃がギリギリと痛い、こんなに痛いのはゴクウモンをお供に加えた時、コーケスククリューブローを腹に叩き込まれた上で如意棒で肋を碎かれ、命からがら禁錮時を嵌めた時以来だ。少しバイオレンスな空気を思い出してくる。特に意味もなく禁錮時締めてやろうか。

「何故、デューコモンの庇護を離れ我が校に？」

「庇護なんてありませんでしたから。雇つた私に任せきりなのはまだいいとして、養育費はまともに出さない、私の給料は低い、なのに明らかに関係ない仕事までさせられる。ベルゼブモン宛のラブレターの焼却は普通の仕事内容に含まれないでしよう？」

少なくとも普通のベビーシッターなら、と続けるマーメイモンの顔はまるで能面のように平坦で感情が見えず、ベルゼブモンと言つた時にかすかに笑つたぐらいしか変化は無かつた。

そしてこの分だとデューコモンからの資金援助は望めない。教育に理解がない相手からお金は引き出せないだろう。ほんの少しだけ期待していた分もあつたというのに残念だ、ベルゼブモンは魔王の援助ということで敬遠されかねないし、そもそも放浪しているデジモンだからそういう援助してくれないかも知れない。

「しかし一番の理由は設備の良さです。水棲デジモン専用の寮がある、しかもそこから海と河に水路が繋がつていて、他にもこの子がどんなデジモンに進化しても対応できるぐらいに設備が充実しているところはありません」

どんなデジモンでも教えが学べるようになると建てた自慢の施設だが、維持費がとんでもなくかかる経営を圧迫している要因の一つでもある。だからなんとかデュードラゴンの名でお金を貰いたい、ロイヤルナイトの中で広めていただければかなりの額が期待できる。特にスレイブモンやクレニアムモンのような賢く堅実であると言われるデジモン達からいただければその輪がさらに広がつて行くこともあります。

「そう言つていただけるとは光榮です」

「ただ、だいぶ赤字続きのようですね、最初に連絡を取つた方から聞きました。」

またさらりとそんなことを言つてくる、このまま断られたらお金を引き出せない、この話は無かつたことにされては困る。だが、ならどうしたらいいのかというのもわからない。

「その時担当したのは誰でしたでしょうか？」

「名前は伺えませんでしたが少女のような高い声でした。テンションも子供のようで事務仕事したことないだろと思つたのを覚えていました」

チヨ・ハツカイモンだ、間違いない。色気よりも教えよりも何よりも食い気、ゴクウモンやサゴモンみたいに一時間弱授業をやり通すこともできない、常に学食で給食を作り、つまみ食いしている。電話がなつたから反射的にとつたのだろうが何も経営状況を漏らすことはないはずだ。

「で、ですね。私をここで雇つて欲しいんです。経理として」

「はい？」

「デュードラゴンから養育費と未払の給料ぶんどつて来たものの、失職したんです」

だからなぜうちで雇われようということになるのかがよくわからない。赤字になるとわかっているところになぜ行くのか、というよりも、ピチモンの入学のために来たんじゃないのかという感じがある。「ピチモンは強い子です、ロイヤルナイトと七大魔王に関わったから、周りに何かあるかもしれないというだけです。私がこここの経営を立

て直す代わりに入学を認めて下さい」

「入学に関しては問題ないのですが……これ以上誰かを雇うには
……」

お金が無い、絶望的にお金が無い。本当に経営を立て直せるのかと
いうこともあるし、難しい部分があると思う。

「給料は経営を立て直すまでいりません。デューケモンのところで数
年遊んで暮らせるぐらいに稼ぎましたから」

ならなぜ仕事をするのかということになるのだが、仕事してないと
死んでしまう類なのだろうか。しかし、断る理由は無い。
「なら、お願ひしてもよろしいですか？」

この言葉から半年も要らなかつた。マーメイモンの手腕は本物
だつたし、デューケモンのところでの仕事で得た有力者達とのパイプ
がこんなに太く広いとは思わなかつた。

翌月には迷いの森に住むクロスモンというデジモンと、デュナスマ
ンから多額の寄付金を引き出し、幾つかの組織への就職斡旋を請け負
うことでの収支を増やし、ちゃんと卒業していく生徒が劇的に増えた。
居心地が良すぎたために卒業しない生徒があまりに多かつたことも
経営を圧迫していたらしい。

さらに翌月、スレイブモン、クレニアムモンからの資金援助を受け
るようになり、食堂に別に職員を募集することでつまり食いを防ぐ。
また、成熟期へのアルバイトの斡旋を学校と併設する別の組織として
ちゃんと体系化し一般のデジモンも使用できるようにしてその収支
をこちらに回す仕組みを作つた。その月は赤字になつたが翌月には
回復した。

私の仕事も減つた。経営は任せきりでいいから、存分に教育に専念
することができる、教えを広めることだけに心を傾けられる、さらには
周りとの繋がりが増えたおかげか成熟期以上のデジモン達との関
わりが増えて教えを広められる範囲も増えた。

「本当にありがとうございます、あなたがいてくれなければこうはな
らなかつたでしょう」

今日は職場体験に行つた成長期達のところをマーメイモンと共に

回っていた。今はバツカスモンとケレスモンの工場からの帰り、マー
メイモンの手にはバツカスモンからのお土産のジュースと酒が一瓶
ずつある。

「では、そろそろお給料をいただいてもいいですか？」

そう言うマーメイモンは経理以外でも普通に教員として働いても
いる。給料を出さない理由なんて何も無い、三弟子の給料合わせた額
を出してもお釣りが溢れるぐらいの働きをしてもらつた。

「もちろん、今後ともよろしくお願ひしたいですし、出せる限り出した
いぐらいです」

ではとりあえず今月分、このお酒をいただきますとマーメイモンが
言う。そんなものでいいんですかと言えば後で返せと言われても返
しませんと返され、ならどうぞと言うとマーメイモンは顔をほろりと
緩める。

「実はバツカスモンの酒でこれだけ熟成されたものはほとんどバツカ
スモン自身が飲んでしまい現存せず、下手すれば家を建てられるお値
段になります」

だから返せと言われても返さないと言つたでしょう？とマーメイ
モンが言う。

「私はお酒は飲みませんし、私財もほとんど持ちません、強いて言うな
らばこの学校でしよう」

それに、家を建てられるような額でもマーメイモンが来てから寄付
してくれた中では一番少額のクロスモンからの毎月の寄付金の三分
の一にも及ばない、あまり有名でないのに彼が寄付すると決めた途端
デュナスモンから寄付の申し出が来たり、何者なのだろう。

「私も実はあまりお酒得意じやないんです」

そういえば、サゴモンが飲みに誘つていた時にマーメイモンはいつ
も断つていた。サゴモンはかなりザルなので一緒に飲むのはどれだ
け誘つてもいつもチヨ・ハツカイモンとゴクウモンだけなのだが。
「ならなぜ？」

「ベルゼブモンへ贈ろうかと思いまして、薄い桃色の果実酒を黒づく
めの魔王が飲む、絵になると思いませんか？」

またマーメイモンが少し微笑む、その場を想像するだけでいいかのようだ。

「マーメイモンはベルゼブモンと知り合いなのですね、やはりピチモンの関係で？」

「いえ、デューケモンに子育ての相談をしに来ていまして、私がその場で相談に乗つたんです」

その時の話をするマーメイモンはいつもより饒舌で、顔は緩んだまま、すでにお酒が入つているかと思うような感じ、熱に浮かされたようでもあり、私は経験が無いが、恋をするとこうなるのかかもしれないという感じ。

「マーメイモンは、ベルゼブモンに恋しているかのようですね」

「そうですね、ベルゼブモンの財力には愛さざるを得ませんでした……」

何かおかしいと思いつつ、そうですか、ある種運命なのかもしれませんねと返す。マーメイモンは本当に運命ならばどれほどいいことかという感じにため息をつく。

愛か、ふと考える。シャカモンの教えを書いた経典にこんな一節があつた。

愛より憂いが生じ、愛より恐れが生ず。愛を離れたる人に憂いなし、なんぞ恐れあらんや。

シャカモンの時代の愛とは執着心だった、異性への執着、物への執着、それらがあるから恐れを覚え、憂いを感じる。シャカモンの教えの一つの最終形は命からも執着を無くすこと、故にマーメイモンのそれは諫めるべきとも取れる。だが、今の愛とはまた違う、諫めずともいいのかもしれない。そこに相手を思いやる心があるのならば。

「応援しますよ、その愛」

そう言うとマーメイモンは驚いたような顔をする。

「てつきり諫められるものと思つてました」

経典に則つてとマーメイモンは続ける、わかつていて言つたのか言つた後で思い出したのか、どちらにしても知つていたことは意外だつた。

「経典は幸福になるための物です、この時代においての愛は執着と変わりつつありますからこれでいいのですよ」

「なんだか余裕が出て来たようですね、サンゾーモン校長」

マーメイモンがそう言つて顔を少し引き締める、だけどほんのり口角はあがつたままだ。少しからかわれているような気がしてくる。

「最初に会つた時とは違います」

お金への執着が消え去りましたか?と言われて気づく。私はいつもこの学校と教えに執着していたのだ、故に恐れて憂いていた、学校のために金に執着し、そしてそれを恐れて憂いて、まつたく教える資格など無かつた。

「これもあなたのおかげですよ」

お金への執着が盛大に見えるマーメイモンのおかげで私は執着から離れられたということになる、なんだか皮肉のようで面白い。この事実にも前なら一喜一憂していたかも知れないが、今は本当に心に余裕がある。

「さて、サンゾーモン校長。実は一つ大切な事案が残っています」

大切な事案、挨拶回りは後は翌日で今日回る分はバッカスモンとケレスモンのところでおしまいのはずだが何があつただろうと思う。

「このジユース、みんなで分けるには少なく、サンゾーモン校長一人で飲むには多いんです。一人で飲むにも少し多いぐらいですが二人ぐらいいがいいでしようね」

「……経営復興のお祝いといきましょうか、晩酌には付き合えますかね」

マーメイモンはお付き合いいたしましたがジユースなら付き合えますからね」と笑む。

学校に帰るともう夕食時、私は肉を食べないし、それでも大丈夫なメニューは学食にある。

豆腐を使って作ったハンバーグに、超電磁レモンの酸味を生かした大根おろしのソースがかかつていて、スープの出汁はデジタケと昆布で動物由来の物は無い。

「精進定食を一つお願ひします」

「はいはーい、お肉が無いのに何が美味しいかわからないけど承ったよー……つて、お師匠様か、美味しいよね、精進定食」

ピンクの豚の着ぐるみの中ほどと顔だけ切り取ったみたいな感じの中にスクール水着を着た幼い顔の女性型デジモン、座天使オフアニモンに天界から追放されたいわゆる堕天使、チョ・ハツカイモン。もう慣れたので驚きはしないがこの姿を決めたのはオフアニモンだという、センスを疑わざるを得ない。

「チョ・ハツカイモン、私が言いたいことわかりますよね？」

「……はーい」

「後で校長室に来てくださいね、一人で」

何度説法をしても絶対にどこかしら抜ける、あの慈悲深いことで有名なオフアニモンが匙を投げることになつた理由はわからないができない子ほど可愛いで解決できない時がある。私も一度だけ怒りそうになつてしまつたことがあつた。

「私はデジウナギ重を」

「えー、肉でしょ肉。脂にとにとの角煮にネギタッpriかけた角煮丼と、オプションの温泉卵のセットが今日の私の一押しだよー？」

喉元過ぎれば熱さを忘れるにもほどがあるスピード、チョ・ハツカイモンはいつも悪い意味で疾走感に溢れている。

「それもいいんですけど、太るので」

「胸がか」

マーメイモンの言葉にチョ・ハツカイモンの目がカツと見開かる。一瞬前の笑顔は完全に影を潜め、空腹時のような怒りをあらわにしている。何故か肉以外をマーメイモンが頼むと毎度こうなる、理由はわからない。師匠として弟子の悩みは理解して解決へと導かなくてはいけないので、歯がゆい。

「お腹も」

「胸もか」

「まるで寸胴のように瘦せているチョ・ハツカイモンが羨ましい」

「嫌味だな、嫌味なんだな」

「落ち着きなさいチョ・ハツカイモン」

「たゆんとした脂身の塊をお持ちのお師匠様に目玉焼き程度の私の何がわかるんだー！」

チョ・ハツカイモンはそんなことを食堂中に聞こえるように叫んで厨房に引っ込んでいった。いつものことながら何故かその後は食堂にいるデジモン達の視線が私の胸に集中する

「あの子にも困つたものですね……」

「はい、煽ると素直に乗つて来るのでとても楽しいです」

何か会話が噛み合っていないような気がするがマーメイモンは楽しそうだ、無表情だけど。声のトーンがほんの少し高くなっている。「そういじめてやらんしてくれ、俺のところにその分の負担が来るんだからよ」

首をざりざりと鳴らしながらゴクウモンがやつて来てマーメイモンの頭を軽くはたく。チョ・ハツカイモンのストレス発散は食べるか誰かを殴るか、とてもよろしく無いことなのだが毎度毎度それの相手をするのはゴクウモンだ。一番強いというのもあるし、かなり仲がいい。二人とも良く食べる同士だからかもしれない。

「おーい、ハツカイさんよー！今日のオススメ頼むわー！脂ぎつときとの角煮、美味くつくつてくれよー!!」

にとにかくわからぬところに怒りつつ上機嫌そうなチョ・ハツカイモンの声がしてゴクウモンはふうっとため息をつく。

チョ・ハツカイモンは色々な面で認めて欲しいだけだつたりするようだ、私は立場上認められないことが多いがゴクウモンにはそのしがらみがない、脂ねぢやねぢやの角煮を食べることもできる。

「チョ・ハツカイモンの勧めて来るのは脂ギッシュなものばかりですから毎日食べてたら太りますよ？」

「でもハツカイさんのオススメ、今まで一度も外れたこと無いんだよ、マジでさ」

それに俺は基本動きっぱなしだからなどゴクウモンは言う。野生化で生きて行くことを決める生徒は少なくはなくて、そういう生徒は皆ゴクウモンの授業を受ける。実戦の実践教育に野生化を諦めるものも少數いたりする、それぐらい激しい授業をしているのだ。

私としてはあまりお勧めしていないが生きることからも離れようと思う生徒は基本いない、生きて行く上では最低限の強さというものは必要になつてくる。

「サゴモンはどうしました？」

サゴモンも授業が終わつてそろそろ夕食を取つているはずだ。

「あいつは先に風呂に行くつて言つてました」

そのゴクウモンの言葉を聞いてマーメイモンが微妙な沈黙を作り、そして意を決した様に口を開く。

「……実は女性格のデジモン達からのぞ……」

「あー！ 風呂つてさっぱりしますよねー!!」

マーメイモンの言葉を遮る様にサゴモンが現れてマーメイモンの口を塞ぐ。マーメイモンが何か言おうとしていた様だがサゴモンが耳元で何か言うと黙つた。

「というわけでハツカイ！ なんかさっぱりした魚介系頼むわ！」

「……サゴモン、お風呂に入った後だというのに妙に汗をかいているのですね？」

「早く飯食いたくて走つて来ましたからね。先に飯にすればよかつたかもしだせん」

まあそういうこともあるかと納得する。疲れていると思考力は鈍るものだ。

「ところで、チョ・ハツカイモンも一緒に食べませんか？ たまには正職員五人で夕食というのもいいでしよう」

マーメイモンが言う、なんとなくマーメイモンの性格から考えると意外だがしかし、ベビーシッターをしていたりマーメイモンもそちが本質と言えば本質なのかもしれない。やはり少しおかしく感じるが。

「……笑わないで下さい、ただ好きな相手の真似をしているだけです」

そう言いながら出されたうな重を取つて近くのテーブルに腰掛け、私も精進定食を持つて向かいに座る。

「へー、そんな相手がいんのか、けつこう堅物だと思つてたんだけどなあ」

今度はゴクウモンが言われた通り脂身だらけの角煮丼と温泉卵の小鉢を持つてくる。

「私だつてそういうことぐらいはあります。まあゴクウモンじゃないのでご安心下さい」

「あー残念だなーとゴクウモンが心にも思つていなさそうに笑う。
「じゃあまさか俺……」

「すみません、それはなんのジョークですか? とりあえず全員分のお茶取つて来て下さいエロガッパ」

エロガッパじやねーしと叫びながら従順に素早くサゴモンはお茶汲みに行く。何か弱みでも掴んでいるのだろうかとも思ったが仮にも私の弟子であるのだから大した弱みでは無いだろう。

「ふつふつふ、でー、マーメイモンはその相手とはどこまで行つたの?
付き合つてるの? きつかけは胸? その胸を存分に使つたのかーっ!」

途中自分で胸という単語を出してから暴れそうなチヨ・ハツカイモンが器用にゴクウモンの倍ぐらい盛られた角煮丼を持つてくる。温泉卵も小鉢じやなくてお茶碗に三個入れてある。

「とりあえず食べましょ。今日は貴い物のジュースもありますし」

そう言つてマーメイモンはジュースの瓶を取り出す。一人で飲むには多い、子供達に上げるには少ない、二人で飲むには少し多い。五人で飲むならちようどいい。

マーメイモンがサゴモンにコップを取りに行かせ、そこにジュースをついで行く。

「サンゾーモン校長、音頭を取つて下さい」

マーメイモンが言うと二人の目も私に向く。説法は慣れているが音頭を取るのはあまり慣れていない、でもここではきつちりしなくてもいいのだろう。心に余裕を持つて始めて教えも意味を成すものだ。「では……この学校もお陰様で経営を立て直し、卒業生達も各地で元気にやつているという報告が多数寄せられ、私達もこれからますます励んで行かなくてはいけないわけです。そのためにも心に余裕を持ちましよう、乾杯」

乾杯。四人の声がしてグラスがぶつかり合つてチンツと音を立て

る。一口で飲み干すのももいれば乾杯したのに口をまだつけないものもいる。

そんな四人を見ながら私はゆっくり口を付け、ジュースを口に流す。濃厚な甘酸っぱさと香りが口の中に花開く様に広がり、飲み込むと爽やかな香りと後味を残して消えていく、至極さっぱりとしたジュース。ただ果実を絞つただけの汁とは信じ難いぐらいに美味しい。

ふと顔をジュースから皆に向けるとそれぞれ好き勝手に騒いだり一心不乱に食べていたり、とても余韻に浸れそうには無い。でもこれでいい、私は今この空気に入れているのだ。

汚物達とのバーべキューの物語。

何ともでかい壁だ、真っ白なよくわからんが綺麗な石でできた壁。中は真ん中が高くなつていて地形みたいで、二重三重になつていて城壁がよく見える。真ん中には礼拝堂みたいな建物がある。確かここは天使達の集まる国だつたか、俺たちのいる場所とは真逆の場所だ。

ただまあ、こういう囮つてる国ほど俺達の目当てのゴミ捨て場は外にあつて色々やりやすい。この中を綺麗に保つためにゴミは全部外に集めているんだろう。かなりの広さがある。二度場所を変えてるが端が見えない。要らないものはゴミとしてる可能性もある、気に入らない。

「おいレアモン、ここで止まれ！」

俺の下でどろどろの腐つたヘドロみたいな体を引きずる失敗サイボーグは俺の呼びかけにも答えず止まらない。むしろ速度を上げてぐらいでその背中に組んだ荷台がみしみしと音を立ててる。

「この、止まれっつってんだろうが！」

一発小突いてやるとレアモンは一瞬ふらつとした後でレアモンと似たヘドロの山に突つ込んで止まつた。全く以つて反応の鈍い奴だ、脳味噌まで腐りかけてたのは伊達じやない、途中の町でなけなしの金で脳味噌だけでもちやんとサイボーグ化してもらつてよかつた。サイボーグ化とか一部機械化するのは不具合が起きると本当に辛い。飛べなくなつたり撃てなくなつたりで済めばいいが体に変な指令が出て痙攣したりする。

「アニキ、やつぱりこいつこのままだと楽園に行く前に脳味噌おつ死んじまうんじやねえかなあ、残つてる部分サイボーグにしたけど腐つた部分が戻つたわけじやないし」

黄色いう〇こみたいな野郎がそんなことを言う。それを聞いて緑色のナメクジを趣味悪くしたような化け物とその色違いの黄色いのもううだそだと言つてくる。

「うつせえぞスカモン！ ヌメモン！ ゲレモン！ その金をどう工面す

るつてんだこのゴミ共！」

俺が一発ずつ小突いてやるとやつと馬鹿どもは黙つた。レアモンの再手術だつて一体どれだけの金がかかつたっていうのか、俺がゴミ捨て場から金目の物見つけて売つて、一体いくつの町や小国を練り歩いたことか。まあ足になつたのは俺じゃなくてレアモンなんだけども。

「アニキだつてゴミじやねーか！ゴミ箱入つてさ！」

「うつせえ油虫！そのテカテカの羽にう〇こ塗り付けんぞ！」

ゴキモンつて名前の黒光りするやつにそう言つてやるとへいへいへいと頷いてその場のゴミを漁り始める。

「こらへんは新しいゴミみてえだからな、もしかしたら食い物も混じつてあるかもしんねえ！よく見て探せ！」

おーと馬鹿どもが威勢よく返事をする。まあこいつらも実際わかつてんだ。金がねえと旅はきつい。俺達みたいな弱つちいデジモンは狩りして食つて行こうとしてもそうそう狩れねえ。基本的に町に入るのすら嫌われちまう。

ゴミ箱一つにう〇こ一つ緑と黄色のナメクジが一匹ずつに油虫が一匹、そして死にぞこないのヘドロのサイボーグが一つ。みんなまとめて汚物だなんだと言われるデジモンだ、嫌われるし疎まれるしどんだけ清潔にしてようがそれは変わらない。ここに至つては街の中に入ることすら拒否された、汚物に尊厳はねえと言わんばかりだ。

「アニキ、良いもん見つけた！金属だ！」

小一時間経つとスカモンが何かを見つけて俺のところに持つてきた。どうやら食器の類らしいそれを適当にボロ布で拭いてみる。機械のメンテナンスなんかもできなきやいけなかつたから金属系や機械系にはそこそこ強い。貴金属に強くなつたのは汚物になつてからだけど。

「黒ずんじやいるがこいつあ銀だな、悪くねえ。よくやつたじやねえか」

鍋を取り出してレアモンからそこそこ距離を取る。あいつはガスが常に出てるから引火すると死んじまう可能性もある。少し離れた

場所で容器に入つた廃油に火をつけてその上で水を沸かす、鍋の中の水も前のところで買った水だ。綺麗な水は汲めればいいけどそういう手に入らない、結果的に買うことになる。

沸いた湯の中に粉を入れて食器を放り込む。これで銀が元通りになる、不思議だが粉自体は割とありふれたものだ。食用にすらなつている。

「アニキ、こっちにも金属のやつ見つけた！」

さらに一時間ぐらい経つとヌメモンやゲレモンも銀らしきものを見つけてきた。資産家が一斉に処分したのかもしれないし、こういう類のごみが集められるゴミ捨て場だつたのかもしれない。

「お前らもいいペースじゃねえか。しかし……もつと再利用とかすればいいのによ、もつたいねえ。食物ならともかく銀製品なんて安くもねえだろうに」

俺達は旅しながらいろんなと場所のゴミ捨て場やら裏町やら、場合によつちや街の外で野宿やらさせてもらつてたがこれだけ、ゴミの中から金になるものが見つかるのも珍しい。

そんな風に思つてると使えそうな少し曲がった鉄の棒を見つけた。先端には曲がった標識がついていて、それも塗装された鉄の板らしい。リアモンの背中の荷台の補強に使えるかも知れない。

その鉄の棒があつた下から車輪が覗いているのが見えた、確かゴムをつけて使うタイヤとかいうタイプのやつ。パッと周りを見る限りゴムらしいものはないがまあ使えるだろう。

「おいゴキモン！こっち来い！作業が楽になるぞ！」

リアモンの荷台に車輪をつけて背中に乗せずに後ろにつければ大分負担も減る筈だ。幸い材料はゴロゴロ転がつてやがる。

「ゴキモン！ゴキモン！おいゲレモン呼んでこ……いねえのか、じゃあ……」

周りを見ると誰もいやしない。全くあいつらはどこに行つたんだか、まあ熱心に探しに行つたんだろうが、迷子になりそうな勢いで離れていかれちゃ困る。

「リアモン、ここで待つてろよ。な？」

レアモンが小さく顔を動かすと、機械が擦れ合う音がかなり大きくなる。首のパーツが鋸びてきてやがる、後で油を注してやんなりやいけないだろう。

全くしようがない奴らだと探しに行くと、集まつて騒いでいるバカラを簡単に見つけることができた。

「おい！ サボつて何やつてやがる！」

俺の声を聞いても何か囮んでたものを見ては俺の方を見て、囮んでたものを見ていた俺の方を見てとかなり困惑しているようだ。何か珍しいものでも見つけたのか、

それとも大きすぎて運ぶ手段でもなかつたか？

囮んでたものを見ると俺はつい真顔になつた。

「こいつ、死にかけてねえか？」

黒い影みたいなデジモン。目玉が幾つも付いてなかつたら生き物っぽい影かシミかにしか見えねえようなデジモン。明らかにその目玉に力はなく、ほとんど閉じかけているのを無理やり開けているよう見える。

「そ、うなんだよアニキ！」

「助けてえんだよアニキ！」

「どうすりやいいんだよアニキ！」

「触れねえんだよアニキ！」

「お前ら落ち着け！ そして黙れ！」

騒ぐバカ共を黙らせてまずは本当に触れないか確かめる。触ろうとしても確かにその下のゴミしか触れない、本当に影そのものみたいだ。

「ゴキモン！ レアモンと荷物全部持つて来い！」

こいつが影でも何かの上に乗りさえすればそれごと移動はできるかもしねれない、触ろうとしても触れないやつだ、揺れてもそんなにダメージにはなるまい。

「おい、聞こえてるか。聞こえてたら瞬きでもなんでもいい、返事しろ」

俺が呼びかけると目玉が一つ瞬きする。それを見ておおどどよめ

くゴミ共を睨みつけてもう一回そいつに視線を向ける。

「今助けるからな、俺達にできることはあるか？あるなら瞬き一つ、ないなら二つしてくれ」

「怪我したつて感じじやねえな、弱ってるつて感じか？」

瞬き一つ。

「普通にものを食つたり飲んだりはできるか？」

瞬き二つ、やっぱり実体のないタイプらしい。実体のないのに、で起きることがあるつてことは……

「お前は寄生するタイプのやつで、俺達の誰かに寄生して栄養を分けてもらえれば助かるかもしれない。そういうことか？」

瞬き一つ。

「よし、俺に寄生しろ。触つてできるか？」

瞬き一つ。俺はすぐに影の上に手を置く。すると俺の影の中に溶け込むようにしてその姿が消えた。と同時に急激に力が抜けていく。このバカ共にやらせなくて本当に良かつた。ゴミでも俺は一応完全体、こいつらとの体力の差は比べるべくもない。

「あ、り、が、と、う」

俺の口が勝手に動いてそんな言葉を作る。

「礼なんかしなくていいぜ！アニキは助ける代わりにいっぱい働かせてくるからな！」

「本当に人使い荒いもんなアニキ」

「俺もよく怒られるもんな。手がないんだから引きずらずに運ぶなんて無理だつての」

「一回廃材で貝殻作つて俺の背中にくつ付けてなんで進化しねえつてキレたことあつたぞ」

「それ言うなら俺もだ、食い方が汚えつて怒られる」

「スカモンの食い方は本当に汚えから仕方ねえよ、食つてる分よりもしてる方が多いだろ」

バカ共が好き勝手言い始めるが力が抜けすぎてまともに怒鳴つてやることもできない。後で殴つてやろうかと思つてるとゴキモンが

レアモンを連れて走つて來た。こつちだこつちと手を振るバカ共に突つ込んで跳ね飛ばしてその動きを止める。ざまあみろ。

「アニキ！連れて來たぜ！」

「おう、よくやつた。とりあえず食物よこせ、こいつに吸い取られて死ぬほど腹減った」

「何言つてんだアニキ、そいつに喰わせなきや意味ねえじやねえか？頭の中までゴミになつたのか？」

「察せ油虫！」こいつは俺に寄生したんだ、俺の食つた分から栄養取るようになつてんだよ」

ゴキモンは今ひとつよくわかつてなさそうな顔してなげなしの食料を荷台から降ろした。

バカ野郎めと悪態を吐いて食おうとしたらスカモンに顔面殴られた。

「なんでアニキが食うんだよ！」

「お前は俺にこいつが寄生した一部始終見てただろうがバカう○こ！」

おい、今の流れならわからないふりしてアニキに一撃喰らわせられるぞとか話し出したヌメモンとゲレモンを睨みつけて、今度こそと乾燥させた小麦の塊を口に含み、唾液でふやかしながら食う。正直ますい。粥にすれば良かつたが鍋も使つてるし仕方ない。

「丁度いいしお前らも飯にすんぞ、ほれ、デジタケぐらいなら生えてんだろ、探して来い」

やつぱり人使い荒いだなんだと文句を言いながらバカ共が散つていく。自分もと動き出すレアモンを引きずつて止めて鍋の中身を空ける。洗つて使いたいここだが水を買うのも金がかかるから布でふき取るぐらいにしておく。まだ何もしないよりはマシだ。

俺の影が形を変えて目の前にさつきの姿を作る、どうやら俺の影と同化したらしい、心なしか丸くなつたのは栄養とりすぎて太りでもしたのかも知れない。

「なんだ？ 手伝いたいって感じか？」

瞬き一つ、手伝いたいみたいだ。

「でもお前実体ないのに何もできることねえだろ、それにさつきまで死にかけてたんだ、元気になつてからでいいんだそういうのは……そういうや帰るところはあんのか？」

帰るところがあるのならその方がいい、世の中には好んで寄生デジモンを受け入れて痩せようとかする金持ちもいるらしいから、そういうこともあるだろう。

瞬き二つ、ないらしい。まあ寄生デジモンもやっぱり嫌われやすいデジモンだ。

「おう、悪いこと聞いた……なんかお前、薄くなつてないか？」

丸く、色も薄くなつてきてているように見える。俺が寄生対象として良くなかったのかも知れないのかと思って慌ててそう聞いてみるとそうじやないらしい。

となると、後は死にかけたときによく起ることと言つたらあれだ、退化と進化。

「退化すんのか？」

瞬き二つ。

「進化すんのか？」

瞬き一つ。

そして白くなつた影が実体を持つて立ち上がり、卵に似た形を組んで行つたかと思うと俺の影の中から抜けて白い卵になり、その卵がびしひとひび割れて翼みみたいな耳みたいなのが二つ出て、卵の中からピンクと白のヌイグルミみたいのが出てきた。

「お前わりと可愛い感じになるのな、びっくりしたぞ」

そう声をかけるとぱたぱたと耳か翼かわからんものを動かして俺に向けて飛んで張り付いた。俺はゴミだから手になんかつくぞと耳みたいなのを引っ張つて剥がす。思つたよりべたつきが付いてない、肌がツルスベつとしているからか。

「結局言葉は話せねえのか？」

俺が聞くと首を縦に振つた後、でも物は持てると言うように足元のゴミを一つ持ち上げた。じゃあデジタケでも取つてきてもらうかと思つていると、その持ち上げた紙クズからキラリと光るもののが落ちて

きたのを見つけた。

なんだと思つて摘み上げるとどうやらそれは金のリングに宝石もはめ込まれたもので、かなりの大金になるのは間違いないものだつた。

見つけたこいつは、お手柄だやつたーとでも言うようにピヨンピヨン跳ね回つていたが、流石にこれは綺麗すぎるし、歪んでもなく傷ついてもない、年期は入つているがむしろ大事にされていたように見える。それが何かの紙の中に混ざつちまつて一緒に捨てちましたんだろう。

「こいつあ、多分間違えて捨てちまつたやつだろうな。明日にでも街に持つてくことにするぞ。イニシャルまで彫られてんだ、なくしたやつは困つてんだろ。よく見つけたな」

そいつはこくこく頷いて、俺の手から受け取ると他のやつとは別の場所に置いた。誰かが大事にしていたものだと言つたからか、一度置いた場所のごみを退けて、木の板みたいなのを持って来て、ハンカチみたいな布を敷いてそこの上に改めて置いた。

それから大体一週間、ルミナモンというらしいそいつはすっかり俺の近くが定位位置になりつつある。頭のわつかは発光させることができるものみたいで集合するときに非常に都合がいいし、スカモン達より手先も器用だつたから、仕分けだつたり分解だつたりを手伝つてもらつた。

「そろそろここともお別れだ。積むもん積んだな？」

おおと返事が返つてくる。大分長居しちまつたが売れそうなものもたくさん集めたし、荷台も新調、次の街にサイボーグ系の技術があればレアモンももう少しマシにしてやれる。

「なあ、ルミナモン、お前はこのまま俺達に付いてきていいのか？どこ行つても俺達は嫌われるぞ？」

一週間の内に何度か聞いたがやっぱりルミナモンは首を振る。これだけまだ使えそうなものがゴミとして出るぐらい物が溢れている国ならルミナモンは豊かな生活が送れるといくら言つても話を聞かない。

「……ついて来たくなつたらいつでも言えよ？よし、バカ共！出発だ！」

俺が声をかけるとおおとバカ共から返事がくる。じやあ行くかと荷車の上だつたり、レアモンの背中の上だつたりに登る。俺もよじ登るとルミナモンも一緒に登り、俺の頭の上に乗る。

「降りろ」

頭の上を手で払うとルミナモンはふわっと浮かび上がつて少し頭の上に着地しようとするかの様に旋回した後、何かを見つけたらしく後ろを指差しながら俺の頭を叩き始めた。

なんだなんだとレアモンを止めて振り返ると國の方から茶色っぽい鎧のデジモンがこちらに向けて手を振つていた。

「おーい、君達。少しだけいいかな？」

獸っぽい形の鎧だが、背中には翼が生えていて天使の様にも見える。國の中のデジモンか、ゴミを持つてたらまずかつたのだろうか。

「私はドゥフトモン。君達にお礼を言いに来たんだ」

何かしたかと考えると指輪のことぐらいしか思い当たらない。それよりもなんか聞いた名前な気がする。まあ、種族の名前だ、他にいつもおかしくはないかも知れないが。

「君達のおかげで私の友人は救われたんだ。盗まれ、犯人は捕まつたものの返つてこず、もう二度と手元には戻つてこないだろうと思つていたところに君達が指輪を届けてくれた。彼女はとても嬉しそうだつたよ」

俺の手を握つて振り回すドゥフトモンに俺は戸惑う。天使じゃなくとも聖騎士となそな感じのデジモンだろうに汚物デジモンの俺の手を躊躇なく握つてきてる。こんなのは初めてだ。そういう感じの種族に触るのは久しぶりだ。

「本当にありがとう、君みたいな素晴らしいデジモンに会える機会はそうない。嬉しく思うよ」

あまりにべた褒めされるから軽く後ずさりすると、ずずっと後ずさりしたよりも距離を詰めてくる。

「いや、見つけたのは俺じゃなくてこいつだから、こいつに言つてくれ

れ」

俺がルミナモンを指差すと、ルミナモンは身振り手振りで倒れてみたり、起き上がつたり、なんだりした後に俺を指差す。

「君に恩返ししたくて頑張つたし、持つて行く様に決めたのは君だつて言つてるね。そう照れなくといいんだよ」

いやいや待てと言おうとするスカモンが出てきて喚き出す。

「そうだそうだ！俺達のアニキはすぐえんだからな！俺達みーんな行くところないのをアニキが拾つてくれてなあ！」

「おい！」

「そうそう、レアモンだつて暴走したくないのにしてたのをアニキが止めてなあ！」

「あれは俺の方に突つ込んできたからだつて何度も……」

「俺もゴキモンに進化した途端に追い出されて盗みなんかもやつたがアニキが全部代わりに代金払つてくれて一緒に謝つて殴られてくれたんだぜ？」

「それもお前をこき使う為の先行投資つてやつで……」

「それで金なくなつて、貯めたと思つたらレアモンがやばいつてことでレアモンの為に使うのに一切迷いもしねえんだ！」

「足がなくなつたら困るんだつて……」

そして最後にレアモンがブオオと一声鳴く。

「お前に至つちや何言つてるかもわからんねえぞポンコツがあつ！」

スカモン、ヌメモン、ゴキモン、ゲレモンと叫んだ順に一発ずつ殴り、ルミナモンにもデコピングして、レアモンには体の上で一回ジャンプしてやる。

そしてドウフトモンに向き直るとドウフトモンはフフフと口元に手を当てて笑つていた。

「やつぱり君はいい男だよ。一応入国審査官からは二体と聞いていてね、こんなものを用意したんだ。残念ながら出来合い品で君達のサイズに合わせることはできていらないが、チエーンも用意したから首にかけてくれるといいと思う」

無理矢理手に押し付けられるもののがたいが要らないと俺が

言うと、ルミナモンの首に俺に渡したのと同じ銀色のリングのついたチエーンをかけて、長さを調節したと思ったら余ったところの鎖を二本の指でいとも容易く引き千切る。裁縫糸を切るみたいな感じでルミナモンやスカモン達は気づいてもない。ただありがとうありがとうと日々にお礼を言うだけだ。

手の中のチエーンを見るがこれは銀か、切れなくはない、切れなくはないがルミナモンに一切衝撃を伝えずにできるかと言われたらできるわけがない。俺は汚物デジモンだが完全体の中で特別非力つてほど非力じやない、究極体か、にしてもかなりこいつは強い。

「いいね。淑女らしさが一段と上がったよ、君達もそう思うだろ？」ルミナモンにやんやんやんやとバカ共が騒ぎ立て、レアモンは自分にも見せると鳴いて抗議する。全く、こいつの正体もわからないのに呑気なもんだ。明らかに尋常のデジモンじやない。

聖騎士か大天使かで、強い、そんなの三大天使かロイヤルナイツか……そう考えてロイヤルナイツの一体にドウフトモンがいたのを思い出す。こいつ、ロイヤルナイツじやねえか。

そして改めてリングを見るところちは銀じやない、プラチナだ。あのリングについてた宝石は希少なグリーンマラカイトではあるが小粒もいいところ、プラチナのリングの方が値段は上だ。こんなの二つあればそことこの財産になるし、なんなら、レアモンの体を全身きつちりサイボーグにすることだってできる。

「さすがにお礼にしても高すぎるだろ。百bit拾つてもらつて一万bit渡すような事をするのは意味がわからない」

ドウフトモンをバカ共とルミナモンから引き離してそう聞くと、確かにそうだと頷いた。

「でもね、あの指輪は彼女や私にとつては物としての価値以上に思い出の品としての価値が高いんだ。幾ら長く生きることができても三百年も前のことはきつかけがないとなかなか思い出せなくてね、あの指輪はそのきつかけになるものなんだよ。金ではもう手に入らないものだ」

ロイヤルナイツの立場からしたらこんな金ははした金つて事でも

あるんだろう。そしてきっとその彼女とか呼ばれるデジモンに取つても金は惜しむものじやないらしい。

「それともう一つ職業上の理由でそれは持つていてくれた方が有難い。それがあれば私は大まかな位置が知れる」

「天下のロイヤルナイトがちびっこをストーキングかよ」

「ルミナモンは特殊なデジモンだからね。触られただけで幸運が舞い込むデジモン。例えば穴だらけのテロ計画や異世界へのゲートを開くとか、そういうた危険で半ば博打の様なものをルミナモンは博打ではないものとする事ができる。ね、危険だろう？」

少し振り返るとルミナモンがくるつと回つたりしながら指輪を見せびらかし、バカ共がやんやんやと喝采している。とてもそんな能力を持つている様には思えない。

「それに君もだよ。ガーベモン、君の心がルミナモンを産み出した、ルミナモンを生産できるデジモンと考えられたら君も狙われる可能性はゼロじやない」

「……いつから見てたんだよ。それに、俺達はルミナモンに進化したすぐ後に指輪を拾つてんだ。見てたなら何故来なかつた？さつきのは作り話か？」

「彼女に呼び出されて向かつたら偶然君達がシェイドモンを助けようとしているのを見かけてね。シェイドモン自体非常に危険なデジモンだ、本人に罪はないが……宿主の精神の悪いところを反映してしま�性質の所為で悪の権化の様になつていく。殺そうかどうか判断を迷つていたらルミナモンに進化したものだから驚いたよ。危険ではあるがマーキングに使えそうな物も持つてなかつたし、その気になれば君達の足取りを辿ることも容易いからと一旦保留して私は私情を優先させた。正直君達を観察しながらも頭の中は指輪のことで一杯だつたんだよ」

そんな都合のいい事があるのか。流石におかしいだろという目を向けるとドウフトモンはだから危険なんだよと言う。

「ここで、こうしてお礼を受け取る幸運に恵まれたのは遡れば私が指輪のことで頭がいっぱいになつて判断を躊躇してたりしたからだ。

しかしその時ルミナモンはシェイドモンだつた、ルミナモンのもたらす幸運は時を超えて、因果をねじ曲げるのかもしれない。もちろん、その分誰かが不幸になるという意味じゃない、例えば元々は一ヶ月前に解決するはずだった指輪の紛失が、全て一ヶ月後にずらされて君達に幸運をもたらしたのかもしれないという事だ。強いて不幸になつたデジモンを挙げるとすればそれはロイヤルナイツに尋問される事になつたコソ泥ぐらいだ』

そうなると確かにルミナモンの能力はすごい力を持つてゐる事になる。本来はロイヤルナイツに摘発されるはずだつたのを捻じ曲げるとかもあり得るのだろうし、触つた相手の幸運の為にさつきドウフトモンが言つたようなスケールの大きすぎる事が成功してしまうかも知れない。

「……ルミナモンをロイヤルナイツで保護するつてのはできないのか？」

「できるよ。私でもいいけど……クレニアムモンがいいかな、守りに長けてゐるし、居所も安定してゐる。ただ、君達みんながそれを望むならね？ここに私が来た、強引にでも保護しようとする様なロイヤルナイツだつているだろうに私が来た。ルミナモンが触れた君の所に。それは意味があるんじやないかと思うんだよ、そう思わないかい？」

ドウフトモンが俺の頭の上に視線を向ける、つられて俺も上を見上げるとルミナモンが顔面に着地し、後ろからスカモンが、左右からヌメモンとゲレモンがぶつかつてくる。

「アニキはわかつてねーよ。保護されても幸せかもしけねえけどアニキといった方が幸せなんだよルミナモンも、俺達もさあ、アニキのそういうとこ俺どうかと思うんだ」

ゴキモンがそんな事を言いながら隙間からビスビス殴つてくる。

「どうやら決まつたみたいだね。ところで君達は肉と魚だつたらどつちが好きかな？」

俺が馬鹿共を蹴散らしてゐる様子を眺めながらそんなことを言う。それに馬鹿共が一斉に肉と答えるとドウフトモンはよろしいと答え、ちよつぴり胸を張つた。

「ロイヤルナイツが一体ドウフトモンから君達へ、個人的な感謝と友好のあかしにバーベキューを準備させてもらいたい。出発は一日送らせてもらうことになるけど、どうかな?」

俺が断ろうとする前に口をルミナモンが塞ぎ、馬鹿共が一斉に喜びの雄叫びを上げる。ここまで喜ばれたらもう俺だつて流石に止めてやるわけにはいかない。

あれよあれよという間に準備が始まり、転がっている看板とかの中からでかいのを探して表面を削ったり掃除したりして鉄板を用意し、石を拾つて窯を組み立てたり。ドウフトモンの指示の元で汚物デジモンが生き生きと動き回るのは不思議な気持ち悪さすらある。こいつらこんなにできるやつらだつたか?そして俺も手伝おうとするとドウフトモンに止められ、馬鹿共に止められ、ルミナモンに止められ、レアモンが叫び声をあげだす。

夜になる頃にはすっかり準備も整い、ドウフトモンが大量の食糧を持つてくる。余つたら持つていくといいと言いながらロイヤルナイツであるドウフトモン自らが火を起こし、肉を焼き野菜を焼き、果てはパエリアを作り出す。

陶器の皿に肉だ野菜だと彩りよく盛つて一体ずつに差し出すその姿に威厳は一切ない。生まれたばかりの頃とか汚物になる前に向かれて以来の気安い優しさ。

「……ありがとよ」

俺がドウフトモンにそう言うとルミナモンが俺の口元に肉を無理やり突きつけて食わせようとして来る。仕方ないからその肉を食べてルミナモンにもありがとうと言えば急に上機嫌になる。感謝されたかつたらしい。

そんな感じで少し経ち、それなりの量を詰め込んだところでドウフトモンの手から箸だトングだといったものを奪う。

「お前食つてないだろ。ここからは食う側に回れよ」

「……ありがとう。でもパエリアだけは私が見よう、焦げ付かせてしもうと台無しになるからね」

馬鹿共は美味しい美味しいと言いながら食い、ありがとうありがとうと

盛つてやるたびに言う。それをドゥフトモンはじ一つと見ている、なかなか気持ち悪いしさつさと食えよと思う。

「肉が冷めちまうぞ」

そう言いながら新しい肉を追加してやる。古いのから食つて全部ちよつと冷めた感じで食うのは少しだけ残念だ。

「気遣いありがとう、ただ、嬉しいし楽しくてね。つい眺めてしまつた」

何が嬉しいのかわからないと俺といつの間にかに俺の頭の上にいたルミナモンが首を傾げるとドゥフトモンは楽しそうに話しおした。「立場上憎まれ口を叩かれることも多くてね。なんでもつと早く来なかつたとか、被害をもつと減らせなかつたのかとか、完璧にやつても当然だと言われることも多い。それを不満に思うわけじゃないが、君達は小さなことでもすぐ喜んで、ありがとうございますと言つてくれる。それがとても嬉しいんだ」

天下のロイヤルナイツが当たり前に感謝されるだけで喜ぶとか一休どんな状況にいればそうなるんだか。

「いつもありがとうな」

俺が言うとドゥフトモンが一瞬キヨトンとなり、その後で無理してそんなこと言わなくていいよと笑い出す。

「おい馬鹿共！もう一回ドゥフトモンに感謝しとけよ！」

「パエリアできたのかいアニキ！」

「マジで！パエリア楽しみ！」

「パーエリア！パーエリア！」

パエリアコールをしだす馬鹿共に煩いぞ黙れと一喝する。

「ロイヤルナイツってのは国とか関係なく首突っ込んでくれやがる！そのおかげで旅してるデジモン相手だからとアコギ過ぎるやり口でやつてる奴らも野盗みたいな奴らも色々と牽制されてんだ！」

アニキ、よくわかんねーという声が全員から帰つてくる。

「つまりだ、ドゥフトモン達のおかげで俺達はまともに旅する事が出来てるつてことだ馬鹿共！感謝しやがれ！」

ありがとうありがとう馬鹿共が繰り返し、ドゥフトモンコールを

始める。それをぽかーんと見ていたドウフトモンは俺と目が合うと少し恥ずかしそうに頬を搔いた。

「なんか催促したみたいになつたね」

「いいだろ、催促したつて。あいつらが言われたから感謝してるのは確かだけどよ、嘘言つてるわけでもねえんだ。気分悪いか?」

俺が言うとルミナモンもドウフトモンの前でぶんぶんと腕を振つたりしながら何やらドウフトモンに伝え出す。大方お陰で俺達に会えたとか、そんなところだろう。

「いや、最高だね。これがルミナモンの力かと少し戦慄してよ。君達に会つたのが私だつたのは意味があつた。私がルミナモンに触れたから、この素敵な出会いをくれたんだろう」

ドウフトモンがおもむろに立ち上がり、パエリアの鍋に手をかける。

「さあ、できたよ！お待ちかねのパエリアだ！」

ドウフトモンコールが一気にパエリアコールに変わる。その様に俺とドウフトモンは苦笑しながらパエリアを皿に盛つていく。すでにできているものだからドウフトモンも俺も含めて全員で談笑しながらパエリアを食う。

ただ楽しく、ただ美味く。俺達の囲むバーべキューにあるのはそれだけだった。